南　原　遺　跡

発掘調査報告書

1985

芝川町教育委員会

南　原　遺　跡

発掘調査報告書

1985

芝川町教育委員会

序

古くから南原遺跡のある楠金は「嫁泣かせ」と云われる程、朝日が早く、日暮れが遅い。陽あたりの良い地域で、富士川が一望できる高台で、近くには清流の大沢があり、遺跡の包蔵地として関心が持されていました。

土地所有者の住宅建築に伴い、埋蔵文化財の包蔵地ということで、県教育委員会の指導の下に昭和59年７月２日～８月７日まで、炎天下の猛暑が続く中で発掘が行なわれました。本年の暑さは特に厳しく、調査作業にあたる調査員、はじめての発掘作業にたずさわる地元の作業員の皆さんは本当に汗びっしょりになり、苦労は大変なものでありました。狭い面積での発掘調査ではありましたが、多くの成果をあげることができました。ここに報告書が発刊されるにあたり、調査にあたられました方々のご協力に深く感謝申しあげる次第でございます。

広範囲にわたる遺跡の部分発掘ではありますが、この報告書が地域古代史をひもとく資料として活用されますことを願い、発刊の序として併せて今後の調査活動にもご協力をお願い申しあげます。

静岡県富士郡芝川町長

野　村　登　喜　男

例　　言

1. 本書は静岡県富士郡芝川町長貫に所在する南原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は個人住宅の建設工事に伴い、その事前に行なわれた記録保存のためのものである。
3. 調査は昭和59年度の国・県の補助金を受けて、芝川町教育委員会が主体者となり、昭和59年7月2日から8月7日までの約1ケ月をかけて実施した。
4. 調査は静岡県教育委員会文化課の黒田勝久、鈴木良孝を担当者とし、他に早稲田大学大学院生渡辺康弘、文化課山田元広の参加を得て実施され、調査に関する事務は芝川町教育委員会事務局があたった。
5. 資料整理については鈴木が中心となり、主として静岡県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において行なわれた。
6. 本書の執筆は調査にあたった者が分担し編集は鈴木が行なった。執筆分担は以下の通りである。

   第Ⅰ章　四　条　衍　明　　第Ⅱ・Ⅴ章　黒　田　勝　久

   第Ⅲ・Ⅳ章　鈴　木　良　孝
7. 調査の遂行にあたっては、町文化財保護審議会委員、県文化課職員を始め、以下の方々に指導・助言をいただいた。

   稲　垣　甲子男　・　鈴　木　敏　中　・　伊　藤　昌　光　・　羽　鳥　靖　子
8. 発掘調査に関する資料及び出土品は芝川町教育委員会で保管している。

＜発掘調査及び整理作業参加者＞

片田きく江・佐野圭司・佐野貞一・佐野はる江・佐野ひさ・佐野一二三・佐野文子・佐野政子・佐野昌行・戸井口房子・仲亀真由美・中村八重子

西尾陽子・鈴木清子・杉田充恵・丹島かつ子・秋山よしの（静岡県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）

＜芝川町教育委員会＞

教 育 長　望月三男

事務局長　篠原節男　　局長補佐　朝比奈幹雄

社会教育係長（派遣）　高田知安　　社会教育係長　四条衍明

主　　事　望月重人　　社会教育指導員　小代田大岸　　同　佐藤幸夫

嘱　　託　市川久美子

用 務 員　仲亀陽子

南原遺跡発掘調査報告書

目　　次

序　　芝川町長　野村登喜男

例　言

第　Ⅰ　章　調査に至る経過 …… 1

第　Ⅱ　章　環　境

1. 地理的環境 …… 2

2. 歴史的環境 …… 2

第　Ⅲ　章　調査の経過

1. 調査の方法 …… 4

2. 調査の経過 …… 7

3. 遺跡の層序 …… 7

第　Ⅳ　章　調査の概要

1. 検出された遺構 …… 11

2. 出土した遺物 …… 22

第　Ⅴ　章　ま　と　め …… 37

挿　図　目　次

第　1　図　位置及び周辺遺跡分布図 …… 3
第　2　図　グリット配置図 …… 4
第　3　図　周辺地形図 …… 5
第　4　図　土層模式図 …… 8
第　5　図　遺構全体図 …… 9
第　6　図　住居跡実測図 …… 12
第　7　図　土坑実測図 1 …… 13
第　8　図　〃　2（集石土坑）…… 15
第　9　図　〃　3（土器埋設土坑）…… 17
第　10　図　1 号配石遺構実測図 …… 20
第　11　図　2 号配石遺構実測図 …… 21
第　12　図　土器実測図 1 …… 23
第　13　図　土器実測図 2 …… 25
第　14　図　土器拓影図 1 …… 26
第　15　図　〃　2 …… 27
第　16　図　〃　3 …… 28
第　17　図　〃　4 …… 29
第　18　図　〃　5 …… 30
第　19　図　〃　6 …… 31
第　20　図　土製品実測図 …… 32
第　21　図　石器実測図 1 …… 33
第　22　図　〃　2 …… 34
第　23　図　〃　3 …… 35
第　24　図　〃　4 …… 36

挿　表　目　次

第 1 表　周辺遺跡地名表 …… 3
第 2 表　土坑の長径・短径相関表 …… 18
第 3 表　土坑計測表 …… 19

図　版　目　次

図 版 Ⅰ　1、調査区完掘　2、調査拡張区完掘
3、調査区全景（表土剥ぎ）　4、町会議員遺跡訪問

図 版 Ⅱ　1、竪穴住居跡（ＳＢ01）　2、配石遺構全景
3、２号配石（拡張区部分）　4、１号配石遺構

図 版 Ⅲ　1～3、土坑（1、ＳＰ67　2、ＳＰ68　3、ＳＰ74）
4～6、集石土坑（4、ＳＰ34　5、ＳＰ60　6、ＳＰ89）
7・8、土器埋設土坑（7、ＳＰ87　8、ＳＰ119）

図 版 Ⅳ　出土遺物１（1～6、出土土器　7、出土土製品）

図 版 Ⅴ　出土遺物２（1～13、打製石斧　14、石皿　15、石鏃　16、石錘）

南　原　遺　跡

第Ⅰ章　調査に至る経過

富士郡芝川町長貫に所在する南原遺跡は、台地上の畑から広範に縄文時代の遺物が採集できる有数の遺跡として、古くから知られていた。既に『県史』第一巻には芝富村楠金からの縄文土器と石器の出土が報じられており、本遺跡が文献上に紹介された初出のものである。また昭和54年に発行された「静岡県遺跡地名表」には、南原遺跡として登録され、縄文時代中・後期の遺跡とされている。その間に昭和46年に発掘調査された小塚遺跡の報文では、本遺跡で採集された縄文時代中期中葉から後期前葉の土器拓影図が載せられている。

昭和58年10月、遺跡内の土地所有者である佐野仁氏は住宅建設の確認申請を提出した。これに対し芝川町教育委員会は、建設予定地が数万平方メートルに及ぶと考えられる「南原遺跡」内であろうと予想し、昭和58年４月、この地点の表面調査を実施した。その結果、縄文時代中期の土器片を確認し、ここが南原遺跡の一部であると判断した。

昭和59年６月２日、町教育委員会は静岡県教育委員会と遺跡の取扱いについて協議し、国・県の補助金をうけて、発掘調査を実施することとした。調査は町教育委員会が主体となり、担当者として県教育委員会文化課の黒田勝久、鈴木良孝の両名の派遣をうけ、他に、渡辺康弘(早稲田大学大学院博士課程)、文化課山田元広の参加を得、実施することとした。調査は約 200 ㎡を対象として昭和59年７月２日より約１ケ月の予定で開始した。

第II章　環　　境

第 1 節　地理的環境

南原遺跡は富士郡芝川町長貫字楠金に所在し、国鉄芝川駅の西北約 1.2 ㎞の台地上に位置する。

本遺跡は富士川左岸に形成された段丘上に存在して、この地一帯は芝川町の北端となる天子ケ岳を基点として東南にのびる尾根の南端終末部に広がる舌状台地であり、西裾は富士川が、また東側は芝川が洗う形で南下し、台地の先端部で両河川は合流する。遺跡の所在は合流地点より 800 ㎞程度の上流になる。

遺跡の所在する台地は東西約 150 ㎞、南北約 350 ㎞の広がりを持ち、南側で狭まる三角形状で、南側に緩かに傾斜を持って広がっている。台地西側は富士川に向い急傾斜しており、また東側は一段高い段丘との間を開析する大沢によって深く侵蝕されて断崖を形成しており一段高い段丘面である砂原、上の段の地区と分断される地形となっている。

南原遺跡はこの台地の北半中央に位置しており、標高は約 110 ㎞程度で、台地の西裾を廻る国鉄身延線との比高差はおよそ30㎞程である。遺跡の現状は蔬菜類を中心とする畑地として利用されており、集落は遺跡をめぐる台地の周辺部に形成されている。

今回の調査区は、遺跡の中心部と考えられる台地中央から外れた大沢川寄りの台地東端部の約 250 ㎡である。

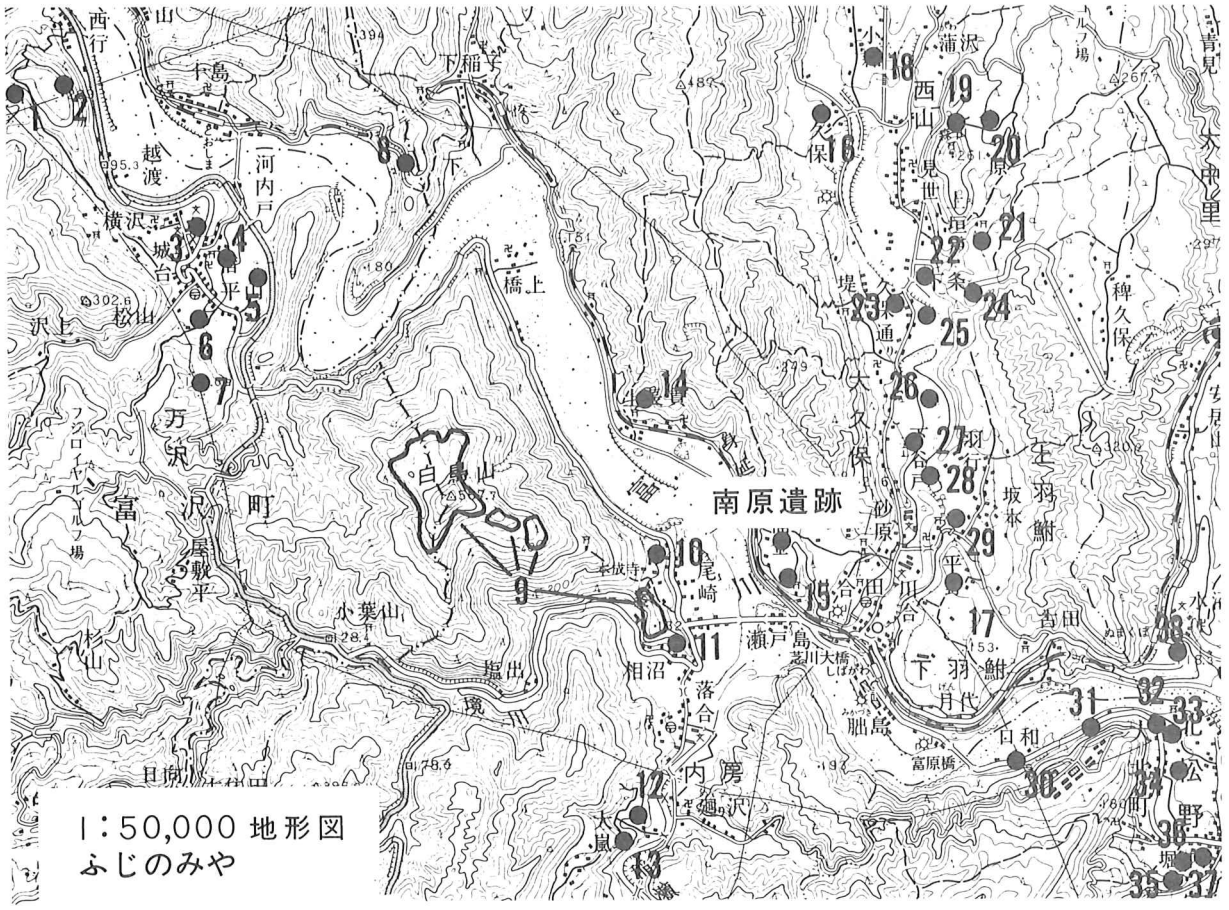
第 2 節　歴史的環境

南原遺跡が所在する富士郡芝川町には、静岡県遺跡地名表（静岡県教育委員会　1979年）において33の遺跡が記載されている。それらの遺跡の年代は圧倒的に縄文時代の物が多い。

これら縄文時代の遺跡は芝川町内を流下する芝川・富士川などの河川の流域に分布しており、河川の形成する段丘上に立地している。

この内発見されている遺跡の密度が最も濃い地域は芝川流域であり、現在町内では、昭和46年に調査が実施された小塚遺跡を始めとして、21遺跡が確認されており、比較的低い段丘面上に立地している。これに対して南原遺跡が所在する富士川流域には町内では 4 遺跡が確認されているのみであり、山梨県側でも、富沢町万沢地域にやや密集するにすぎない。また南原遺跡が所在する同一台地の南端部には橋場遺跡（旧石器時代？）が存在する。芝川流域に比べ遺跡数が少いことはこの地域では富士川が急峻で遺跡が立地し得る平担地が少いことがあげられよう。他に稲子川、稲瀬川流域にも遺跡が確認されている。

芝川町内における発掘調査は昭和46年の小塚遺跡の調査が挙げられるが、他に本格的な調査が実施された経違はなく、いずれの遺跡についても詳細は不明の点が多い。この地域の持つ位置的な意味からも今後の研究の進展が期待される。



第１図　位置及び周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡地名表

富沢町(山梨県)		11	上ノ山遺跡	富士川町	
		12	大和沢A遺跡		
1	赤坂遺跡	13	大和沢B遺跡	30	口和遺跡
2	天水遺跡	14	宮ケ谷戸遺跡	31	出水屋遺跡
3	城台・天神堂遺跡	15	橋場遺跡	32	北ケ糸遺跡
4	古御所遺跡	16	久保遺跡	33	外原Ⅰ遺跡
5	中尾遺跡	17	平野遺跡	34	外原Ⅱ遺跡
6	栩久保遺跡	18	小森遺跡	35	北松野城跡
7	権現堂遺跡	19	踊場B遺跡	36	儘下遺跡
		20	踊場A遺跡	37	荻氏居館跡
南部町(山梨県)		21	小塚B遺跡		
		22	下垣戸遺跡	富士宮市	
8	十島上の段遺跡	23	向ケ谷戸遺跡		
		24	小塚A遺跡	38	小松原A遺跡
芝川町		25	東久保遺跡		
		26	大明神B遺跡		
9	白鳥山城跡（一部は富沢町）	27	大明神A遺跡		
		28	羽行遺跡		
10	本成寺遺跡	29	坂本遺跡		

第Ⅲ章　調 査 の 経 過

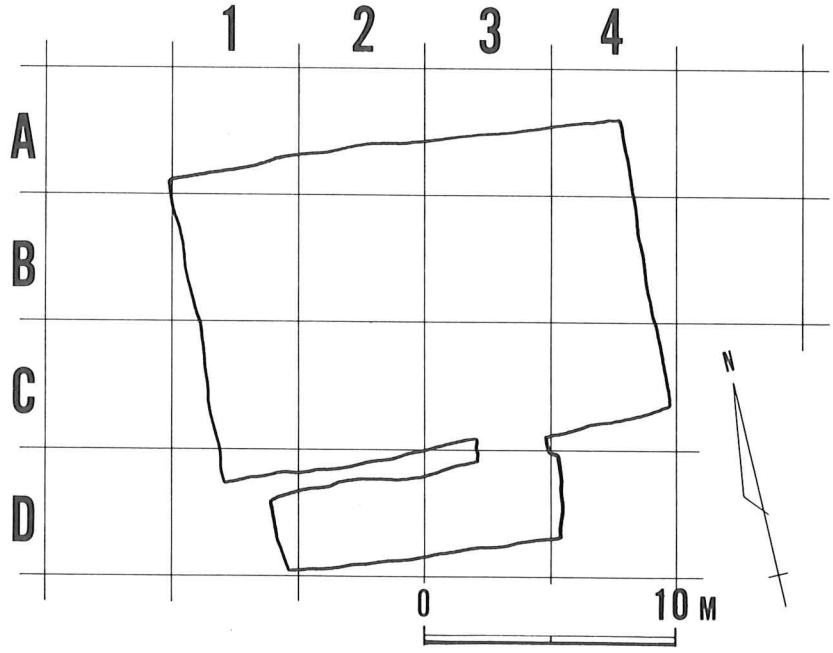
第 1 節　調 査 の 方 法

調査区域は住宅建設が予定されている区域全域の約 200 ㎡を対象とし、5 m × 5 mの網を調査区にかけた。グリットの呼称は北からA，B，C，Dとアルファベットを、西から1，2，3，4と数字を付し、この組み合わせでA－1，C－4というように呼称した。

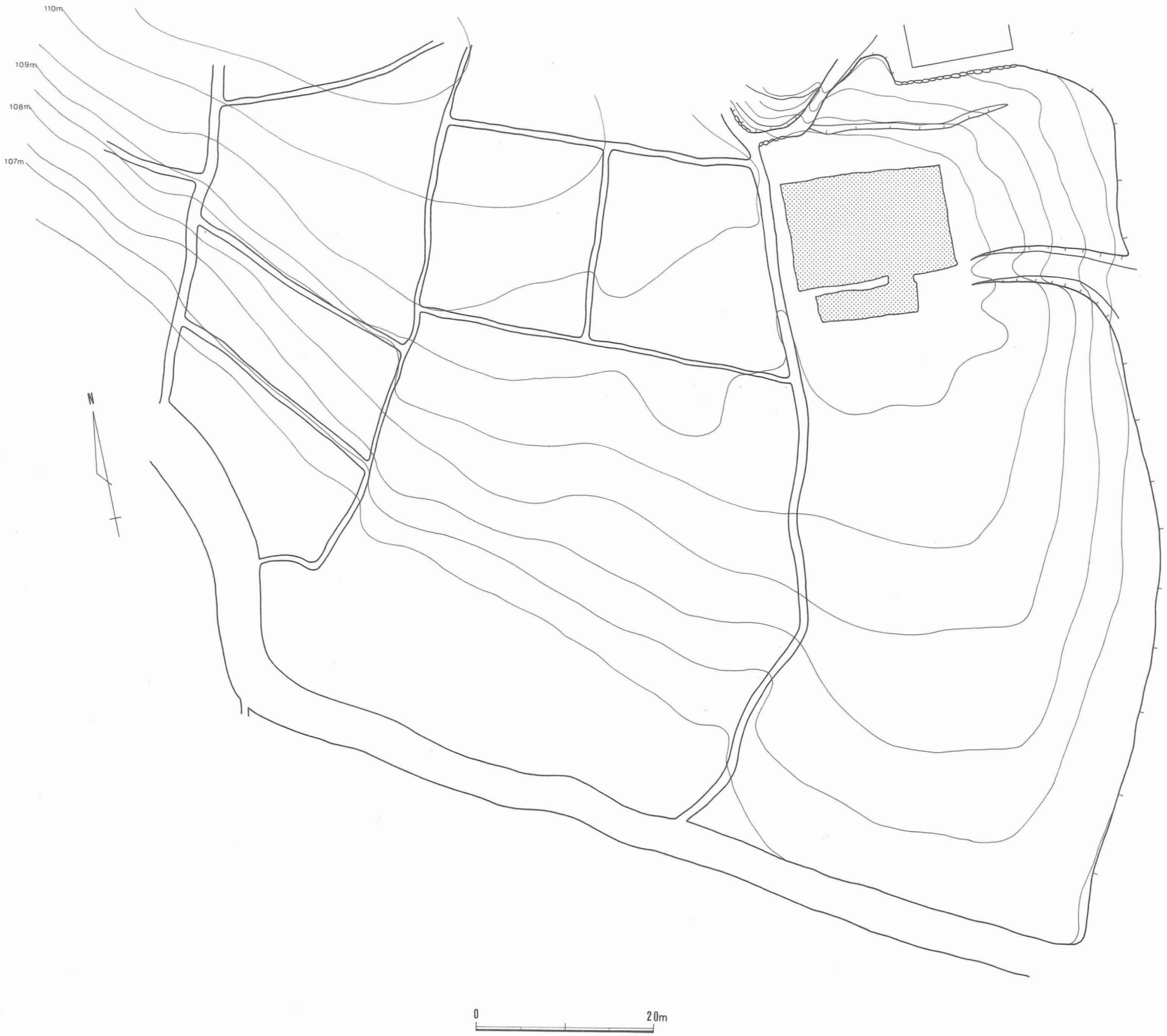
排土に際しては、当初土層観察のため南北及び東西中央に巾 1 mの土層帯を残し四分割して行なった。また西南隅のカクラン及び東南の隅の部分に下部土層の観察のために深掘りのトレンチを設定した。また調査の進展に伴い、配石遺構の延長部を確認する目的で、調査区南側に拡張区（東西約11m、南北約 4 m）を設定した。最終的な調査面積は約 250 ㎡となった。

実測は、調査区全体に遣り方を設定しこれによった。（遣り方レベル 109.5 m）、実測図は遺物出土状況図、遺構平面図については縮尺 1 / 20を原則とし、配石遺構及び土器埋設土坑等一部の遺構については縮尺 1 / 10で作成した。また調査区周辺の地形図を平板測量によって 1 / 200 の縮尺で作成した。

一方、写真による記録は 6 × 7 判中型カメラを主とし、35㎜小型カメラ 2 台（白黒、カラースライド）を補助として使用した。



第 2 図　グリット配置図



第 3 図　周辺地形図

第２節　調査の経過

調査の進展状況の概要を日を追って述べる。

７月２日～７月７日

７月２日より調査を開始する。遺跡西方の水準点よりレベルを移動する。住宅建設予定地の全域に調査区を設定し、基準の杭打ちを行う。十字状にセクション帯を残して耕作土の排土を行う。また調査区東南及び西南の隅にトレンチを設定して土層観察を行う。耕作土下にはしまりの強い火山灰層が確認され、遺構の保存は良好と考えられる。土層は基本的に５層にわけることができた。

７月９日～７月14日

発掘区周辺の地形測量を開始する。遣り方を設定し、１ｍ四方のメッシュを組む。Ⅲ層下面までの遺物出土状態の写真撮影と実測を行う。調査区南部に配石遺構の一部を確認する。

７月16日～７月21日

残存していたⅢ層を排除し、Ⅳ層（調査区全域には広がらない）及びⅤ層上面の調査を行う。調査区中央で竪穴住居跡（ＳＢ01）が検出される。土層観察のためのセクション帯を撤去する。Ⅴ層上面の精査により土坑を18基確認する。配石遺構の検出に伴い範囲とその形状をつかむため、発掘区域の南に拡張区を設定して調査を始める（耕作土の除去には重機を使用）が、配石そのものは顕著に確認されなかった。

７月23日～７月28日

土坑検出と土坑の調査を継続する。個々遺構の写真撮影及び土坑調査の終わった地区から平面図の作成を始める。作業の進捗状況に遅れが目立ち、当初の予定の月末での終了を見直すこととする。土坑は82基を確認する。

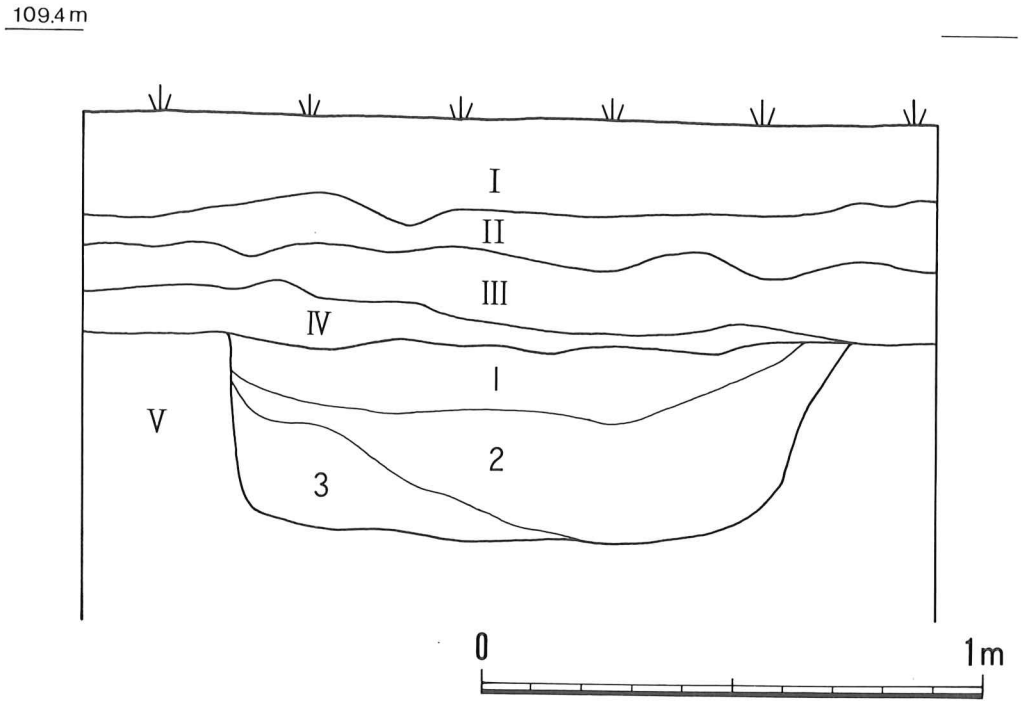
７月30日～８月７日

静岡県教育委員会文化化課長、文化課職員２名を交え、現地で今後の調査の進め方について検討会を持つ。検出された土坑の調査を続ける。配石遺構の実測終了後、配石の撤去を行ない配石下の土坑の調査をし、実測作業を行う。土坑は最終的に119基が検出された。調査区全域の完掘写真を撮影し実測の補足を行った後、遣り方を撤去し、調査区のあとかたづけを行う。工事の都合により埋め戻し作業は後日となるため調査区全体をビニールシートで覆い保護しておくこととする。予定より約１週間調査期間が延長されたが８月７日をもって現地における調査作業を終了することができた。

第３節　土層観察

調査区の層序は、地点により厚さ等に差違があり必ずしも一様ではなく、また全体的にゆるやかに南に傾いているが、基本的には概念図に示したようにⅠ～Ⅴ層が認定された。図は拡張区北壁中央付近の層序を基に製作した物である。以下に各土層の概要を記す。

第Ⅰ層：黒褐色耕作土層、麦蔬菜等の畑地として使用された際の耕作土で厚さは深い所で30㎝、平均は20㎝程度である。



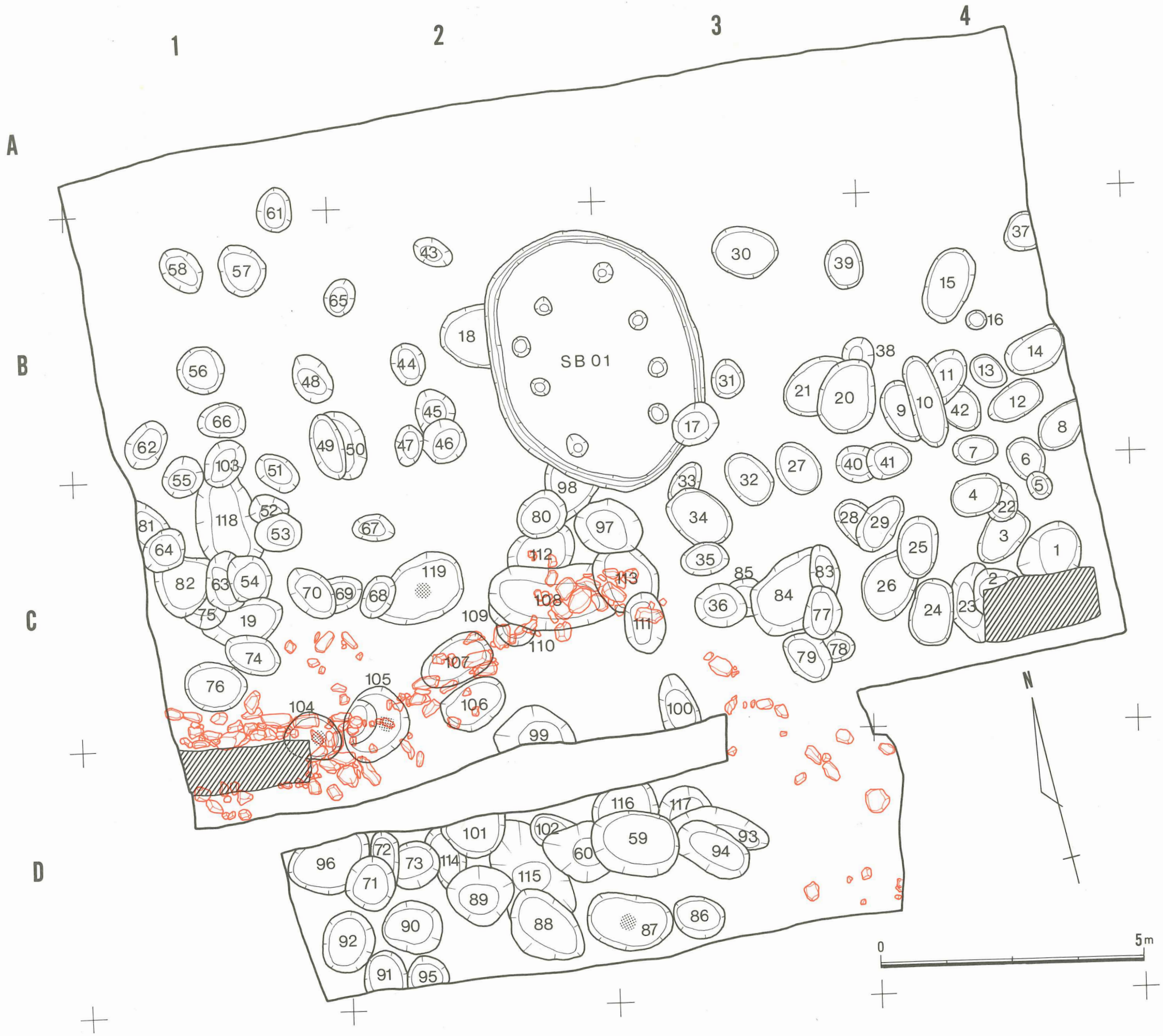
第4図　土層模式図

第Ⅱ層：大沢ラピリ層：赤褐色の細かいスコリア粒と多量に含む黒色土、地元では“まさ”と呼ばれており、非常にしまりが強く深耕の防げとなっている。遺跡の保存においては逆にこれが幸いし、下部遺構への耕作の影響は少ない。層の厚さは場所によって大きく異なり、特に北半では殆ど残存しない。また上面は耕作による凹凸が大きい。

第Ⅲ層：暗褐色土層、縄文時代中期～後期の遺物を包含している。遺構は認められない。平均で15～20㎝の厚さだが北へ向って薄くなっている。

第Ⅳ層：黄褐色土層、縄文時代中期～後期の遺物を多く包含する。調査の南西部の配石遺構の内側部を中心に広がっており、北半及び東側では殆んど見られない。

第Ⅴ層：黄色ローム層、縄文時代遺構が掘り込まれており、年代的には旧石器時代の遺物包含層の可能性があるが、本遺跡では現在までに旧石器時代の遺物は知られず、また今回遺構等は見られないため調査対象からは除いた。



第5図　遺構全体図

第Ⅳ章　調 査 の 概 要

第１節　検出された遺構

a．遺構の概要

今回の調査において検出された遺構は竪穴住居跡（ＳＢ）１軒、土坑（ＳＰ）119基、配石遺構（２基と考えられる）である。個々の遺構については後に述べるが、ここで遺構全体の概要について簡単に触れておく。

遺構は調査区の南半を中心に分布しており、北側部分に分布する物はまれとなる。今回の調査区が遺跡の末端に位置していることを示すものである。遺構の時代はいずれも縄文時代のもので、土器等からは中期～後期のものと考えられるが、遺物は覆土中に混在する場合が多く、遺構そのものの明確な年代を知りうる物は少ない。また遺構の多くは重複している。

遺構の保存状況は前章の遺跡の層序でも述べたように、Ⅱ層が耕作などの撹乱から遺構を保護する形となっていたため、比較的良好であると言える。

b．竪穴住居跡

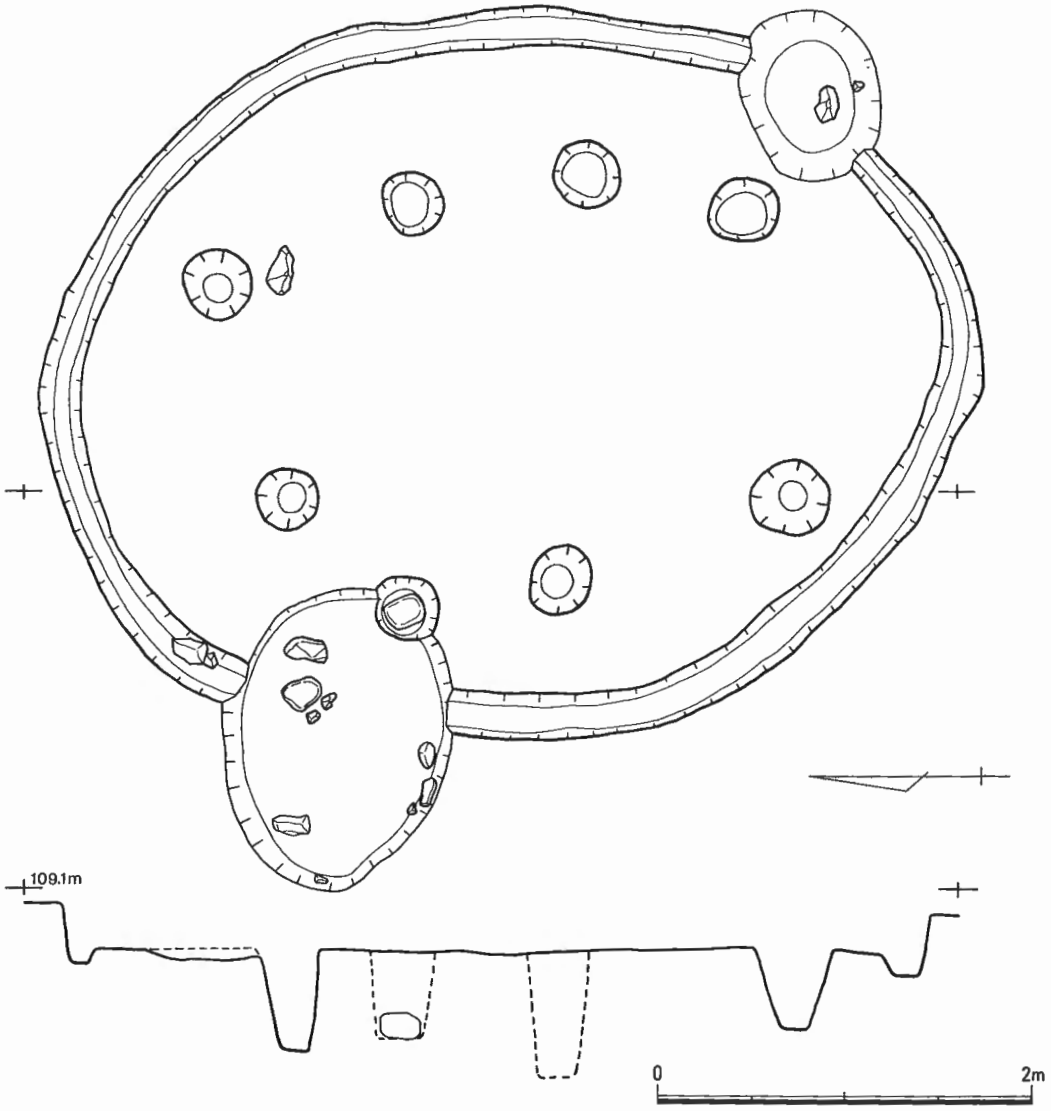
竪穴住居跡は１軒検出された。竪穴住居跡（ＳＢ01）は調査区のほぼ中央のＢ－２、Ｂ－３区で検出され、形状は楕円形で長軸方向はＮ－７°－Ｗであった。大きさは長径5.1ｍ×短径3.9ｍで残存する深さ（床面まで）は検出面より約25㎝を測る。Ｖ層を掘り込んで作られており、床面は比較的保存が良好であった。住居跡は全周に幅約25㎝床面よりの深さ約5㎝の溝を廻らし、柱穴は２本がそれぞれ対応する形で４組、８本が検出された。柱穴は径30～40㎝程度で深さは70～45㎝と若干バラツキがあり、また北西隅の１本には底面に平担な石が置かれており根固め石とも考えられる。住居跡内からは炉跡や焼土等の根跡は認められず、他の内部施設も検出されなかった。住居跡は北西部でＳＰ18、南東部でＳＰ17南部でＳＰ98と３基の土坑と重複関係を持っており、新旧関係はＳＰ18、98がＳＢ01より古く、SP17がＳＢ01より新しい。遺物は少なく、いずれも覆土中より出土した物で中期後葉（曽利Ｖ式併行）後期前葉（掘之内Ⅰ式併行）の土器片等が出土しているが、住居跡に明確に伴う出土遺物はなく、年代を限定することはできなかった。

c．土　　坑

今回の調査において最も多く検出された遺構は土坑であった。総数は最終的に119基が確認された。先述したように土坑の分布は調査区北半では希薄であった。

土坑の形状は大部分が楕円形でその規模については種々であるが、長軸・短軸の比率についてはグラフで見られるように約1.4：１の傾向がうかがえる。

遺構の年代については住居跡と同様にその覆土中及び周辺より縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての土器片が出土していることからこの時期に構築されたものと考えられるが、明確に構築年代を限定できる物は一部の土器埋設土坑のみであった。土器埋設土坑は４基が検出され、いずれも中期のもので

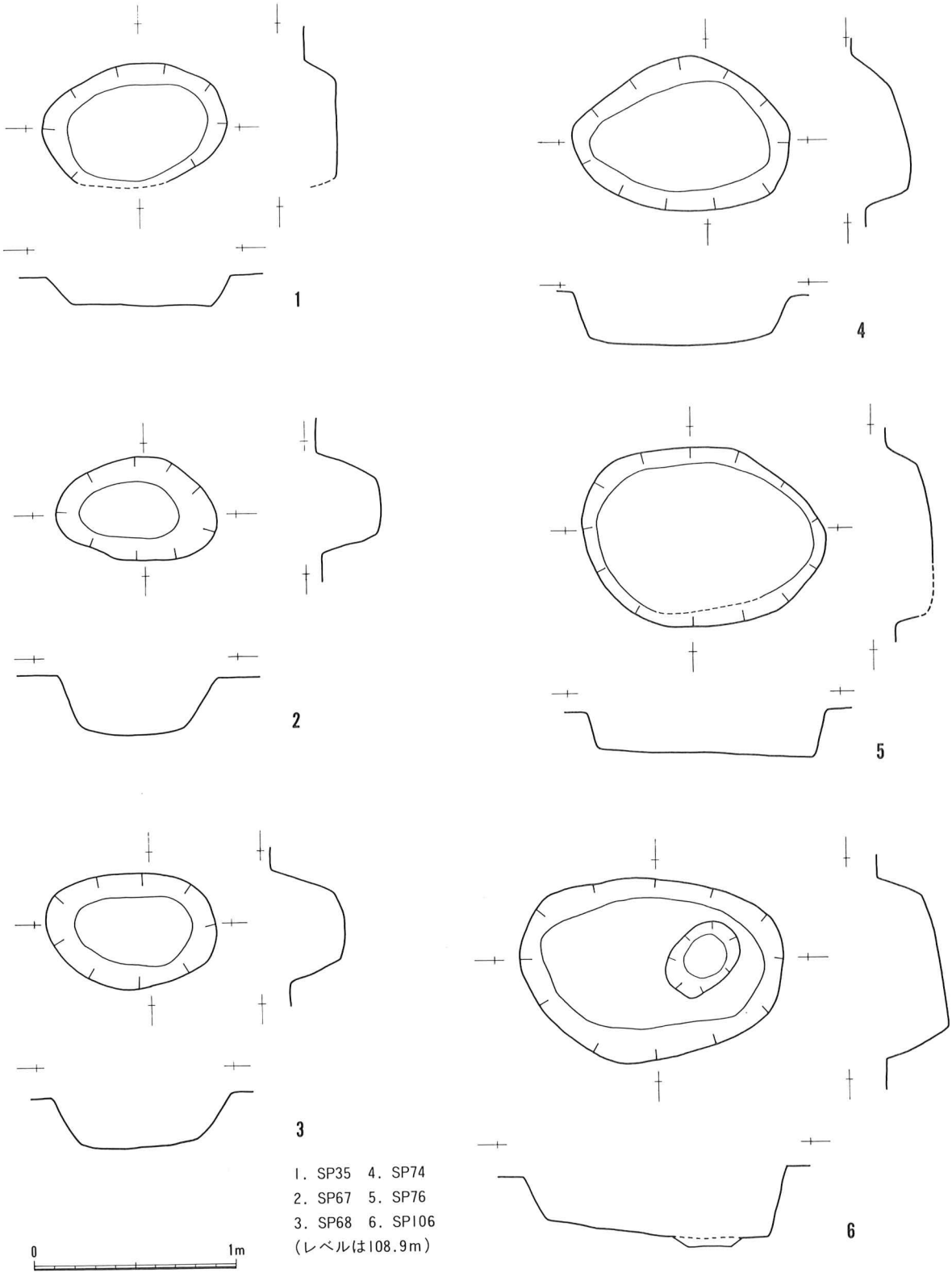


第6図　住居跡実測図

あった。このうち2基は配石遺構下に構築され、配石遺構に伴うものと考えられる。また多くの土坑で覆土中に石が入っており、かなりの土坑が配石を伴うものであったと思われるが、一部の土坑では数個～数十個の石が底面に積まれた形で検出された。土坑の配列については何らかの規則性も考えられ（中伊豆町、1983年）、一部の土坑は大きく環状に配されているとも見えるが、全ての土坑について言えるものではなく、またその各土坑が同年代であるとの確証もないためここではその可能性も存在することを示すに留め、今後の検討、究明を待ちたい。

以下、119基の土坑のうち代表的な物をいくつか選びその説明を施すこととする。

ＳＰ35　調査区中央近くＣ－３区において検出された。確認面でのプランは長軸方位N－88°－Wの楕円形で長径91㎝、短径60㎝の楕円形の形状を呈するやや小型の土坑である。検出面からの深さは15㎝で底面は平坦である。覆土は暗褐色土の単層で５～10㎜程の小風化礫や焼土小粒、炭化物片を少し混える。



第7図　土坑実測図1

北壁部分でＳＰ34と重複しており新旧関係はＳＰ35が新しい。

ＳＰ67　調査区西側Ｃ－２区で検出された。確認面でのプランは長軸方位Ｎ－85°－Ｗのやや歪んだ楕円形の形状を呈し、規模は長径80㎝、短径50㎝で検出面からの深さは30㎝を測る。底面は平担で壁は斜めに立ち上がる。覆土は２層からなり、上層はやや黄色がかった暗褐色土で焼土小粒、炭火物を含み、下層は汚れた感じの暗黄褐色土で１㎝程の小礫を含む。上層では20㎝程の割れた河原石が検出面より高いレベルで見られた。遺物には覆土中より縄文土器片が若干出土しているが、時期は中期・後期の物が混在しており時期の限定はできない。

ＳＰ68　ＳＰ67の南側、調査区西南部のＣ－２区で検出された。確認面でのプランは長軸方位Ｎ－26°－Ｅの楕円形の形状を呈する。規模は長径84㎝、短軸57㎝で検出面は西側が10㎝程高くなっている。検出面（西側）からの深さは36㎝を測る。底面はほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がる。覆土は２層からなり上層はしまりの弱い暗褐色土で炭化物、焼土粒、小礫をかなり多く含む。下層は黒みがかった黄褐色土で焼土粒等を少し含む。上層中には径15㎝程の川原石が見られた。本土坑はＳＰ 119 と重複しているが新旧関係ではＳＰ 119 の方が古い。遺物には土器片が若干見られる。

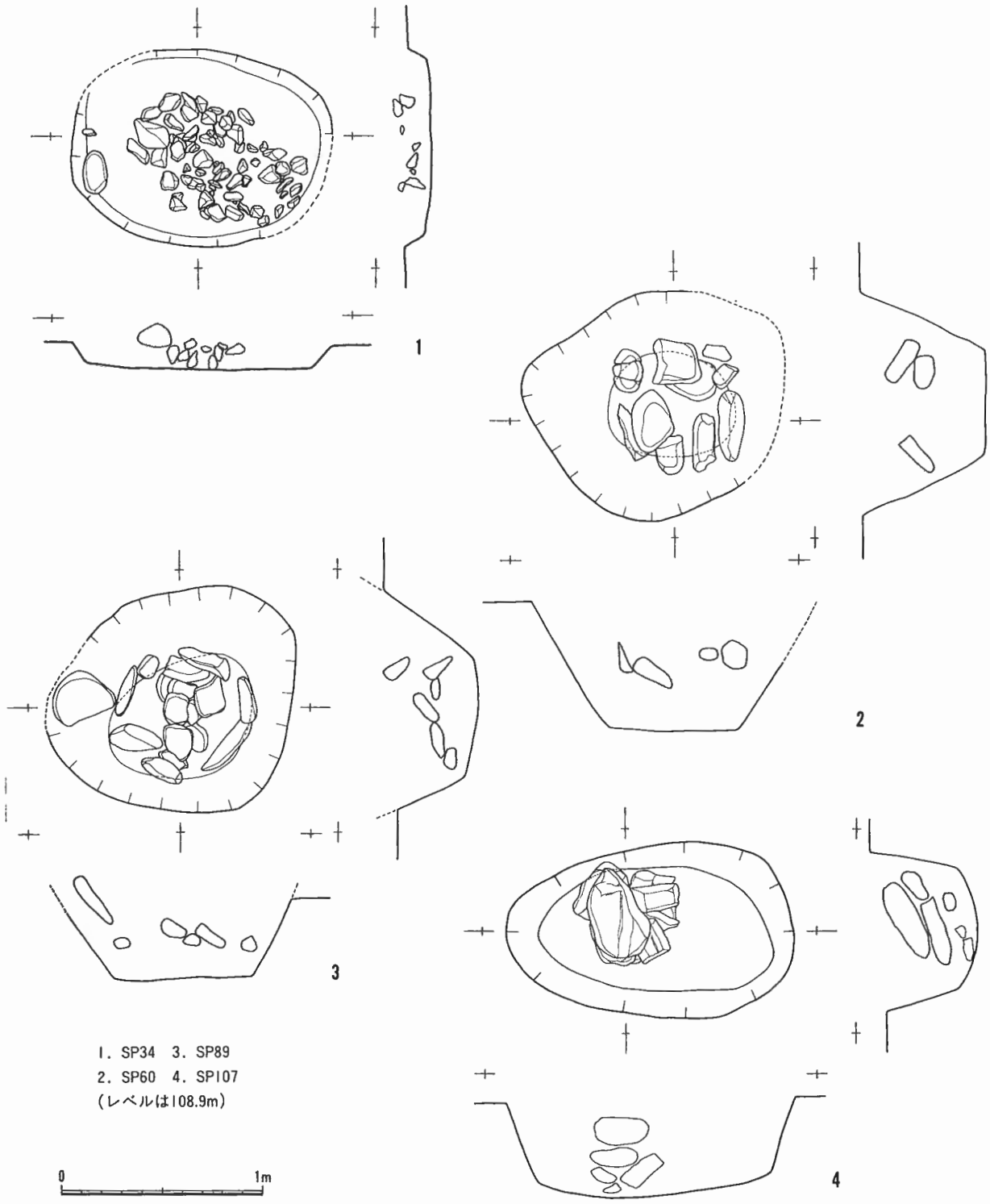
ＳＰ74　調査区西南Ｃ－１区で検出された。確認面でのプランは長軸方位Ｎ－73°－Ｗのやや歪んだ楕円形（卵形）の形状を呈し、規模は長径 108 ㎝、短径76㎝で検出面からの深さは21㎝を測る。底面は南側に傾いており、壁の立ち上りも北壁に比べ南壁は急である。覆土は単層でしまりの弱い暗褐色土で小風化礫、焼土小粒、炭化物等を交える。覆土中には25㎝程度の川原石の破片が検出面より高いレベルで見られた。

ＳＰ76　調査区西南よりのＣ－１区において検出された。確認面でのプランは長軸方位Ｎ－84°－Ｗの楕円形（卵形）を呈する。規模は長径 120 ㎝、短径88㎝で検出面からの深さは20㎝を測る。底面は平坦だが南東方向に少し傾く、壁は急に立ち上がる。覆土は２層からなり上層はしまり弱い暗褐色土で焼土小粒，小風化礫等を含む、下層は暗黄褐色土で焼土小粒，炭化物を含む。上層には径25㎝程度を最大に数個の川原石が含まれ、最大の物は検出面より高いレベルにある。遺物は縄文土器片の他に上層中の川原石の中に磨石の破片が含まれていた。南壁よりの部分にはカクランがあり一部破壊されている。

ＳＰ 106　調査区南よりＣ－２区で検出された。確認面でのプランは長軸方位Ｎ－58°－Ｅの楕円形の形状を呈し、規模は長径 131 ㎝，短径89㎝で検出面からの深さは34㎝を測る。底面は東南方向に傾斜して、壁の立ち上りは東，南側で急である。覆土は２層からなり上層はしまりの弱い暗褐色土で小風化礫，焼土粒等を含む。下層は暗黄褐色土でしまりがやや弱い。底面東側には40㎝×25㎝で深さ５㎝程の掘り込みが見られるがこれにはしまりの弱い黒色土が入っていたカクランで、土坑に伴う物とは考えられない。

集石土坑

以下には土坑中に含まれる石が特に多く集石土坑と考えられる土坑を挙げる。これら集石土坑と考えた物は今までの土坑では覆土中に含まれていた石が覆土の上部に含まれ検出時には石が確認されていたに対し、以下に挙げる土坑では石が底面に接していたり積み石状に重なっていたり、石の個数も多いことから別に扱った次第である。基数は４基が確認されている。



第8図　土坑実測図2（集石土坑）

ＳＰ34　調査区中央付近のＣ－３区で検出された。確認面でのプランは長軸方位Ｎ－45°－Ｗの楕円形の形状を呈する。規模は長径 133 ㎝，短径97㎝で検出面からの深さは19㎝を測る。底面は平坦で壁は斜めに立ち上る。配石の石は他の配石土坑と異なり、握り拳大程度の大きさを中心とする石が総数67個、底面に接する形で検出され、石が小さいことと数が多いことで他の配石土坑と別の性格を持っていたとも考えられる。石は土坑の中央を中心に広がり、まれに焼け石を交えているが焼土等は検出されず土坑内で火を使用したとは考えられない。石の間には縄文土器片が若干見られた。本土坑は北側でＳＰ33。南側でＳＰ35で重複しており新旧関係は古い順にＳＰ33，34，35である。

ＳＰ60　拡張区中央のＤ－２区で検出された。確認面でのプランは東半分がＳＰ59によって切られているためはっきりしないが、長軸をほぼ東西方向にむけた不整形の形状で、規模は長径は推定で 130 ㎝程度，短径は 114 ㎝で、検出面からの深さは63㎝を測る保存状況の良いしっかりした土坑であった。覆土は２層からなり、上層はしまりの弱い暗褐色土で小風化礫，炭化物，焼土小粒を含む、下層は暗褐色土でやや粘性を持つ。石は下層中に含まれ最下の石は底面に接しており、石と石は重り合っている。石の個数は10個で25～30㎝程の大型の川原石が利用されている。石の下には特に遺物などは認められなかった。本土壙はＳＰ59，ＳＰ 102，ＳＰ 115 と重複関係にあるがこのうちＳＰ59よりは古くＳＰ 102，115 よりは新しいという新旧関係にある。

ＳＰ89　拡張区やや西よりＤ－２区で検出された。確認面でのプランは不整形を呈する。長軸方向はＮ－60°－Ｗで規模は長径は推定で 125 ㎝，短径は 112 ㎝で検出面からの深さは47㎝を測る。底面は平坦で壁は斜めに立ち上る。配石は20～30㎝の大型の川原石を使用し総数は17個を数える。最下の石は底面に接し、それぞれ重り合っているが、南北方向の断面図で見られるように中央付近では石の下にはかなりすき間がある。このことは何かの上を石でおおっていた可能性が考えられる状況であるが調査においては石の下から特に遺物等は見られなかった。

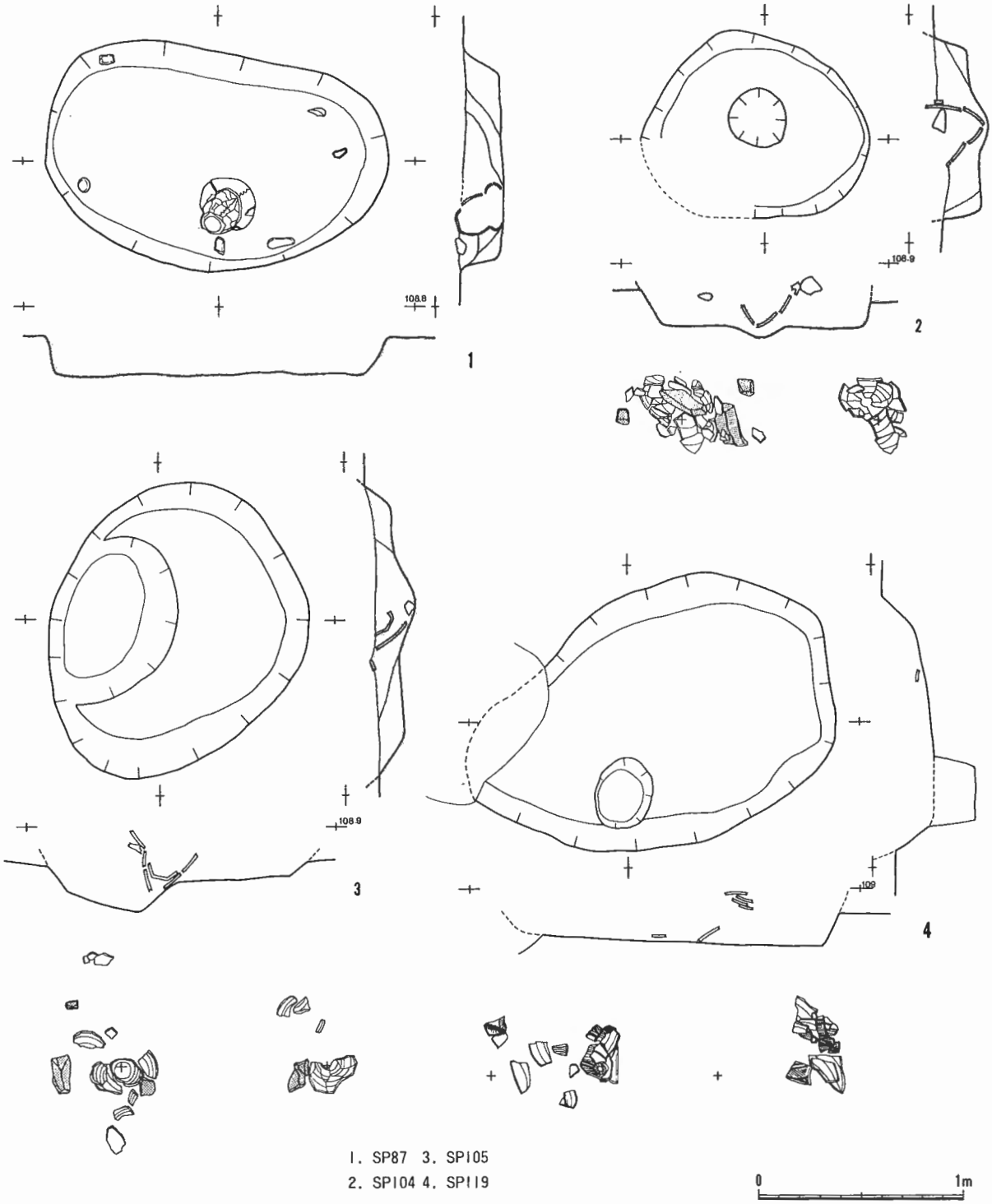
先に挙げたＳＰ60と本土坑には類似点が多く現存はしないが何かの上に石をのせて埋めたと考えられる状況でその大きさ，深さなどから縄文時代の墓坑の可能性が強い。

ＳＰ 107 調査区西南Ｃ－２区で検出された。確認面でのプランは長軸方位はＮ－58°－Ｅの楕円形の形状を呈し、規模は長径 142 ㎝，短径88㎝で検出面からの深さは50㎝を測る。底面は中央が凹む形状で壁はかなり急に立ち上る。土坑内の積石はやや西よりに最大45㎝程の川原石を９個積み重ねてあり、内部には殆んど空間はなく中に物を埋納していたとは考えられない状況であった。この配石土坑に関しては北に隣接するＳＰ 106 の土坑と規模，形状が類似しており、方向も一致している。またこの方向は両土坑の上面の配石遺構の方向と一致しており、両者と配石遺構の間の関係がうかがわれる。

土器埋設土坑

土坑中に完形もしくはそれに近い状況の土器が埋設されていた土器埋設土坑は４基が検出された。このうちＳＰ 104，105 の２基については配石遺構下に構築されており両者の土器の年代は縄文時代中期の終り頃で配石遺構の年代を限定する資料となった。

ＳＰ87　拡張区中央南よりのＤ－２・３区で検出された。確認面でのプランは長軸方位Ｎ－77°－Ｗのやや歪んだ楕円形の形状を呈する。規模は長径 116 ㎝，短径 106 ㎝で検出面からの深さは19㎝を測る。



第9図　土坑実測図3（土器埋設土坑）

底面は平坦で壁は急に立ち上る。埋設土器は南壁よりのやや東よりで倒立した形で出土した。土器は口縁部の一部を欠失してはいるもののほぼ完形で西南方向に傾斜して口縁を土坑底面に据えられている形で検出された。土器の内部には土が入っており特別に遺物等の埋納物は見られなかった。土坑の性格については土器が埋設されていることから墓坑の可能性は当然考えられるが、土器の出土位置と状況からは遺体の頭部にふせておかれていた物とは考えにくく、土坑の規模からは土器棺墓とも考えるにも無理があり性格については墓坑との断定はつきかねる。土器の他の遺物は覆土中より石斧，磨石，叩き石が見られた。

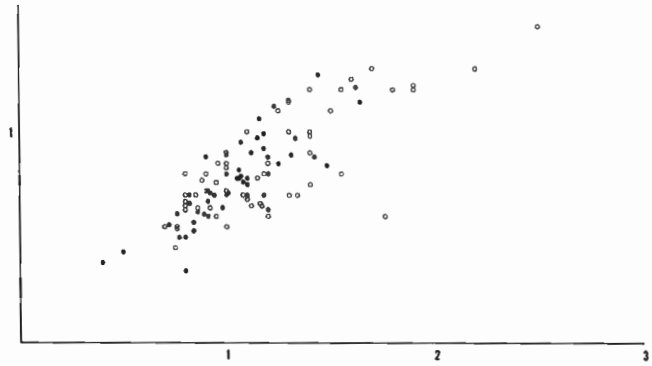
ＳＰ 104　調査区南西のＣ・Ｄ－１区で検出された。西南部を四分の一程度撹乱を受けている。本土坑は配石遺構下に構築されており、土坑の検出は配石の撤去後に行ったため土坑の掘り込み面は確認できなかった。土坑の確認面でのプランは長軸をほぼ東西方向にむけた楕円形（卵形）の形状を呈し、規模は長軸 112 ㎝，短軸90㎝で確認面からの深さは27㎝を残していた。底面はやや南側が低いがほぼ平坦で中央部には径30㎝程の円形の浅い凹みがあり土器が置かれていた。埋設土器は口縁部と胴部の一部をカクラン等によって欠損しているが、おそらくは完形品の土器を土坑底面の凹みに据えたものであり、その土器の内部には20㎝程の扁平な川原石が放り込まれた状況で検出されている。

ＳＰ 105　ＳＰ 104 の東側に隣接して調査区南西のＣ，Ｄ－２区で検出された。ＳＰ 104 と同様に上部には配石を伴っており、掘り込み面は明確につかめなかった。土坑は不整形で最大径 147 ㎝の規模を持つ、確認面からの深さは27㎝を残す。西側半分は一段落ち込んでおり、底面は二段となる。土器の土坑のほぼ中央の位置で、西半の落ち込みの立ち上りに一部もたれかかる形で傾いた状態で検出され、底面からは浮いていた。検出当初は底部片が検出されたが、底部片を取りあげたところ、別個体の土器が検出され、底が欠失している土器の内側に別の土器の底部をはめ込んでいる状態であった。本土坑は隣設するＳＰ 104 と同様に配石遺構の下に構築されている土坑で埋設されている土器も同時期の同じ器形の土器を使用しており両者は近い性格を持った土坑と考えられる。

ＳＰ 119　調査区西側Ｃ－２区で検出された。確認面でのプランは長軸方向Ｎ－60°－Ｅの楕円形の形状を呈している。規模は長径（推定）で 190 ㎝程度，短径は 122 ㎝で確認面からの深さは23㎝を測る。底面は平坦だが東南方向に傾いている。また底面の南壁よりに径30㎝の柱穴様の掘り込みが見られたがこれは上層からしまりのない黒色土が入っていた撹乱である。埋設土器は口縁、底部共になく、土器胴部が言わば輪切りとなっており、これが横倒しの状態で破片となって検出された。出土した土器は縄文時代中期中葉の物で今回の調査において年代が明確になった遺構では最古の物と考えられる。

第 2 表

土坑の長径・短径相関表
（○は推定値）



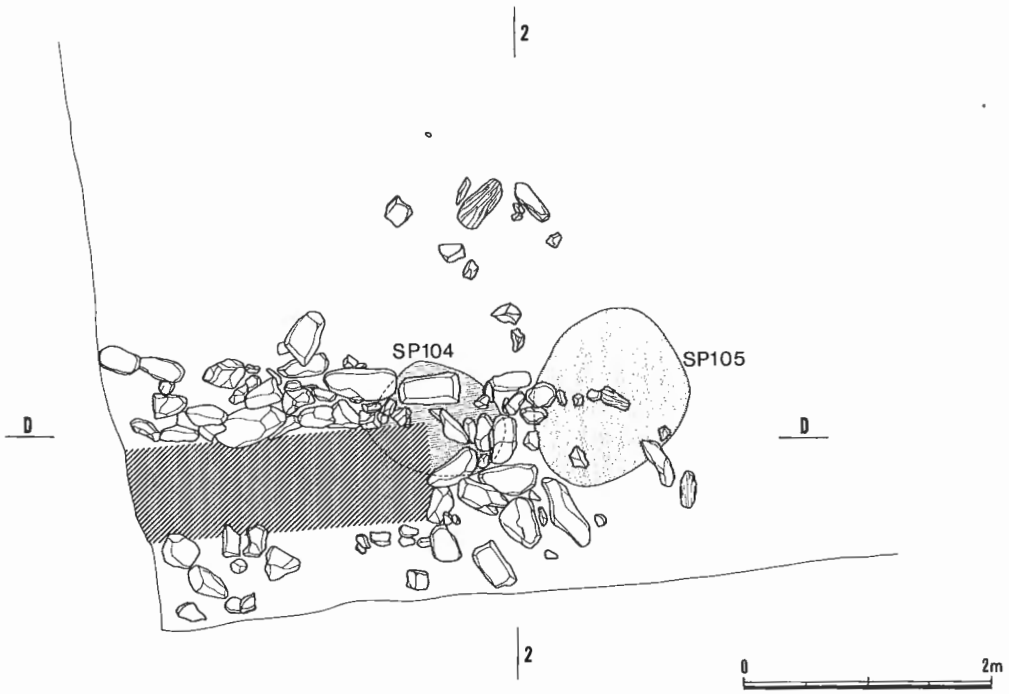
第3表　土坑計測表（単位はcm，（　）内は推定値）

土坑番号	地　区	長径	短径	深さ	備　考
SP 001	C−4	130	(100)	25	
SP 002	C−4	(100)	(90)	25	
SP 003	C−4	120	80	12	
SP 004	C−4	105	78	15	
SP 005	C−4	50	43	16	
SP 006	B,C−4	(86)	64	11	
SP 007	B−4	84	53	11	
SP 008	B−4	(112)	65	14	
SP 009	B−4	118	(80)	12	
SP 010	B−4	176	(60)	15	
SP 011	B−4	(95)	76	13	
SP 012	B−4	(110)	68	48	
SP 013	B−4	(76)	55	12	
SP 014	B−4	(115)	78	19	
SP 015	B−4	148	84	17	
SP 016	B−4	40	38	13	
SP 017	B−3	91	72	15	
SP 018	B−2	162	121	27	
SP 019	C−1	155	(80)	40	
SP 020	B−3,4	(150)	(110)	10	
SP 021	B−3	(140)	(100)	10	
SP 022	C−4	(80)	65	18	
SP 023	C−4	75	(45)	41	
SP 024	C−4	125	85	13	
SP 025	C−4	118	70	20	
SP 026	C−3,4	(140)	98	19	
SP 027	B,C−3	106	82	11	
SP 028	C−3,4	110	70	9	
SP 029	C−3,4	120	63	12	
SP 030	B−3	107	95	18	
SP 031	B−3	76	61	15	
SP 032	B,C−3	106	78	18	
SP 033	B,C−3	(100)	55	17	
SP 034	C−3	133	97	19	集石土坑
SP 035	C−3	91	60	15	
SP 036	C−3	100	80	—	
SP 037	B−4	(100)	72	15	
SP 038	B−3,4	(80)	63	32	
SP 039	B−3,4	92	71	20	
SP 040	B,C−3,4	(80)	67	10	
SP 041	B,C−3	(92)	64	10	
SP 042	B−3	(90)	72	11	
SP 043	B−2	77	50	25	
SP 044	B−2	80	34	37	
SP 045	B−2	(88)	77	32	
SP 046	B−2	85	(70)	30	
SP 047	B−2	76	(54)	31	
SP 048	B−1	101	71	22	
SP 049	B,C−1	116	(66)	38	
SP 050	B−1,2	134	(70)	39	
SP 051	B,C−1	89	61	32	
SP 052	C−1	(80)	70	45	
SP 053	C−1	82	66	40	
SP 054	C−1	(80)	(80)	44	
SP 055	B,C−1	82	70	40	
SP 056	B−1	90	88	34	
SP 057	B−1	100	89	24	
SP 058	B−1	94	70	41	
SP 059	D−2,3	(170)	130	27	
SP 060	D−2	(130)	114	63	集石土坑
SP 061	A,B−1	86	62	21	
SP 062	B−1	98	64	27	
SP 063	C−1	—	—	—	
SP 064	C−1	90	(80?)	30	
SP 065	B−1,2	72	56	30	
SP 066	B−1	91	67	31	
SP 067	C−2	80	50	30	
SP 068	C−2	84	57	36	
SP 069	C−1,2	(160)	125	30	
SP 070	C−1	110	75	48	
SP 071	D−2	(96)	(85)	25.5	
SP 072	D−2	(70)	55	22.5	
SP 073	D−2	(120)	85	28	
SP 074	C−1	108	76	21	
SP 075	C−1	—	—	51	
SP 076	C−1	120	88	20	
SP 077	C−3	(110)	75	50	
SP 078	C−3	(70)	55	32	
SP 079	C−3	108	(70)	30	
SP 080	C−2	(100)	83	40	
SP 081	C−1	—	(70)	44	
SP 082	C−1	(140)	120	30	
SP 083	C−3	95	(60)	32	
SP 084	C−3	(190)	120	28	
SP 085	C−3	(80)	70	40	
SP 086	D−3	107	79	27	
SP 087	D−2,3	116	106	19	土器埋設土坑
SP 088	D−2	164	114	30	
SP 089	D−2	(125)	112	47	集石土坑
SP 090	D−2	115	97	33.5	
SP 091	D−2	(100)	85	27.5	
SP 092	D−1,2	118	92	26.5	
SP 093	D−3	(117)	(65)	31	
SP 094	D−3	(140)	(90)	32	
SP 095	D−2	80	(80)	26	
SP 096	D−1,2	155	(120)	39	
SP 097	C−2,3	118	99	14	
SP 098	B,C−2	—	102	28	
SP 099	C,D−2	(140)	(120)	44	
SP 100	C−3	(140)	75	21	
SP 101	D−2	125	(110)	30	
SP 102	D−2	(110)	68	32.5	
SP 103	B,C−1	100	70	62	
SP 104	C,D−1	112	90	27	土器埋設土坑
SP 105	C,D−2	144	127	27	土器埋設土坑
SP 106	C−2	131	89	34	
SP 107	C−2	142	88	50	
SP 108	C−2,3	(250)	150	45	集石土坑
SP 109	C−2	—	—	—	
SP 110	C−2	(80)	(70)	23	
SP 111	C−3	110	78	19	
SP 112	C−2	130	—	29	
SP 113	C−2,3	(130)	115	23	
SP 114	D−2	(120)	(60)	15	
SP 115	D−2	(220)	130	49	
SP 116	D−2,3	130	—	10	
SP 117	D 3	(110)	(100)	18	
SP 118	B,C−1	(180)	(120)	36	
SP 119	C−2	(190)	122	23	土器埋設土坑

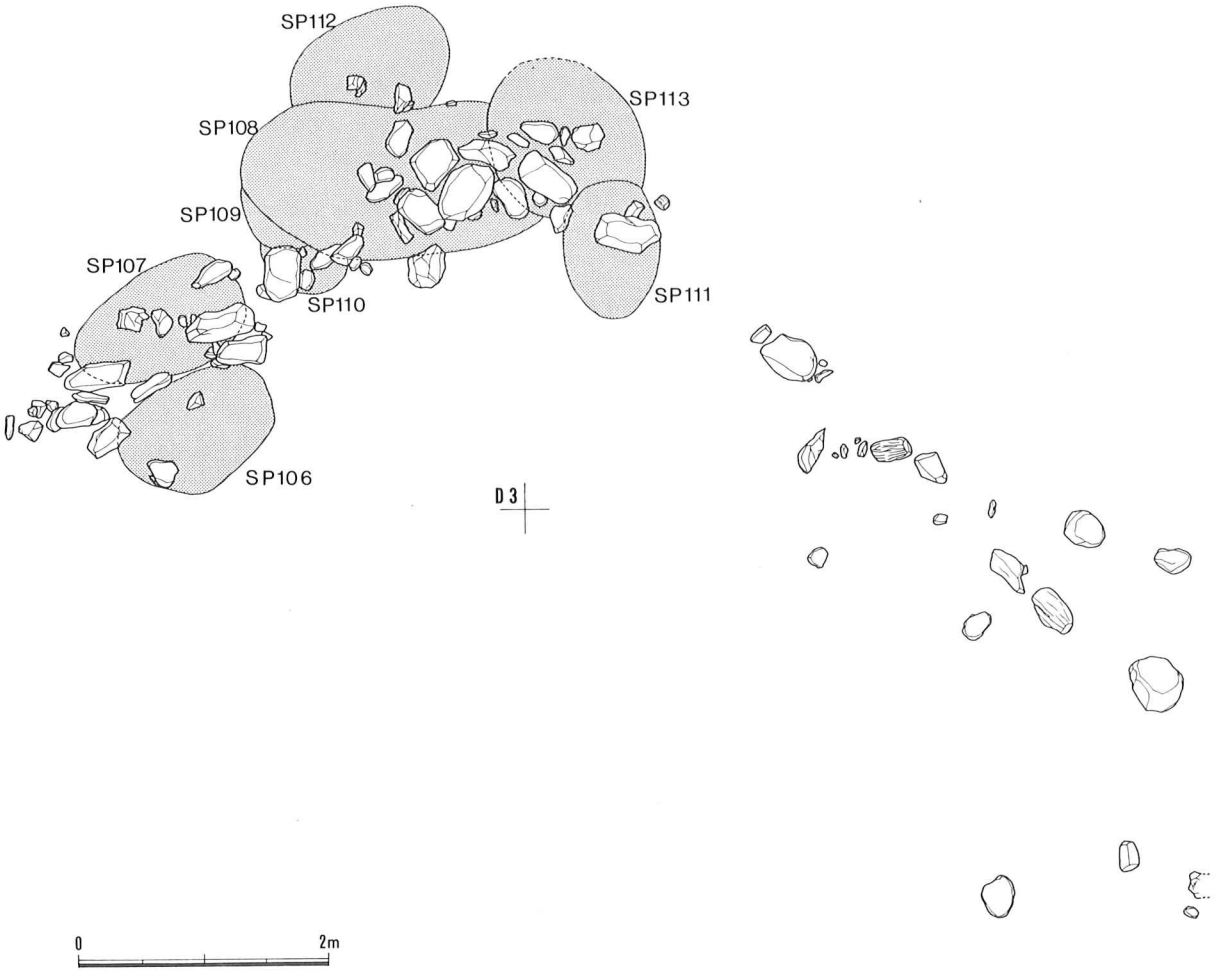
d．配石遺構

調査区の南西部分、C・D－1～3区に2基と考えられる配石遺構を検出した。遺構はⅢ層下面でその一部を検出し、Ⅴ層上面で確認した。なお、この配石遺構の広がりを追求するため南側に拡張区を設定した。

この配石遺構には、石の集中する個所が2ケ所みられる。1つは南西隅の部分であり、検出された部分で東西約3.5m、南北約2.0mの範囲に30～50cm大の細長い河原石が並べられており、そのすき間をこぶし大の石がうずめている。中央部分を後世のイモ穴によって撹乱されており、その部分にも石を並べていたのか、あるいは空白となっていたかは不明である。この部分の配石はまだ調査区外である西側へ延びていく気配がみられる。もう1個所はC－2・3区の東西に帯状に広がるものであり、ここも50cm大のやや細長い河原石が使われている。東西約5.0m、南北約1.0mである。石の集中度は東側が密であり、西側の部分がやや疎らになっている。前述の部分とこの部分については近接しており、あるいは一つのものとして把えられる可能性もあるが、2つの部分の間にはやや空白の部分があり、ここでは2基と考えておく。前者を1号配石、後者を2号配石と呼称することにする。なお、拡張区では、2号配石の東端から直角に屈曲して南へ延びる石の列が検出されたが、かなり疎らであり、配石として把え



第10図　1号配石遺構実測図



第11図　2号配石遺構実測図

得るかははっきりとしない。

これらの配石遺構の年代ははっきりとはしないが、1号配石下から検出されたＳＰ104、105には縄文土器が埋設されており、共に中期末葉の曽利Ｖ式併行ものと考えられる。また配石周辺には中期後～後期前の土器片がかなり見られ、これらによって、この配石遺構の年代も、中期末葉～後期初頭頃のものと考えられる。

第２節　出土した遺物

今回の調査で出土した遺物は縄文時代に属する土器・石器・土製品がある。以下に概要を述べる。

a．縄文土器

今回出土した縄文土器は完形のものは少なく、ほとんどが破片である。また、遺構外の包含層（Ⅲ・Ⅳ層）から出土した物もあり、遺構出土の物についても土坑覆土中から出土した破片が殆どで明確に遺構に伴う土器は少ない。土器の時期は縄文時代中期中葉から後期前葉の物である。

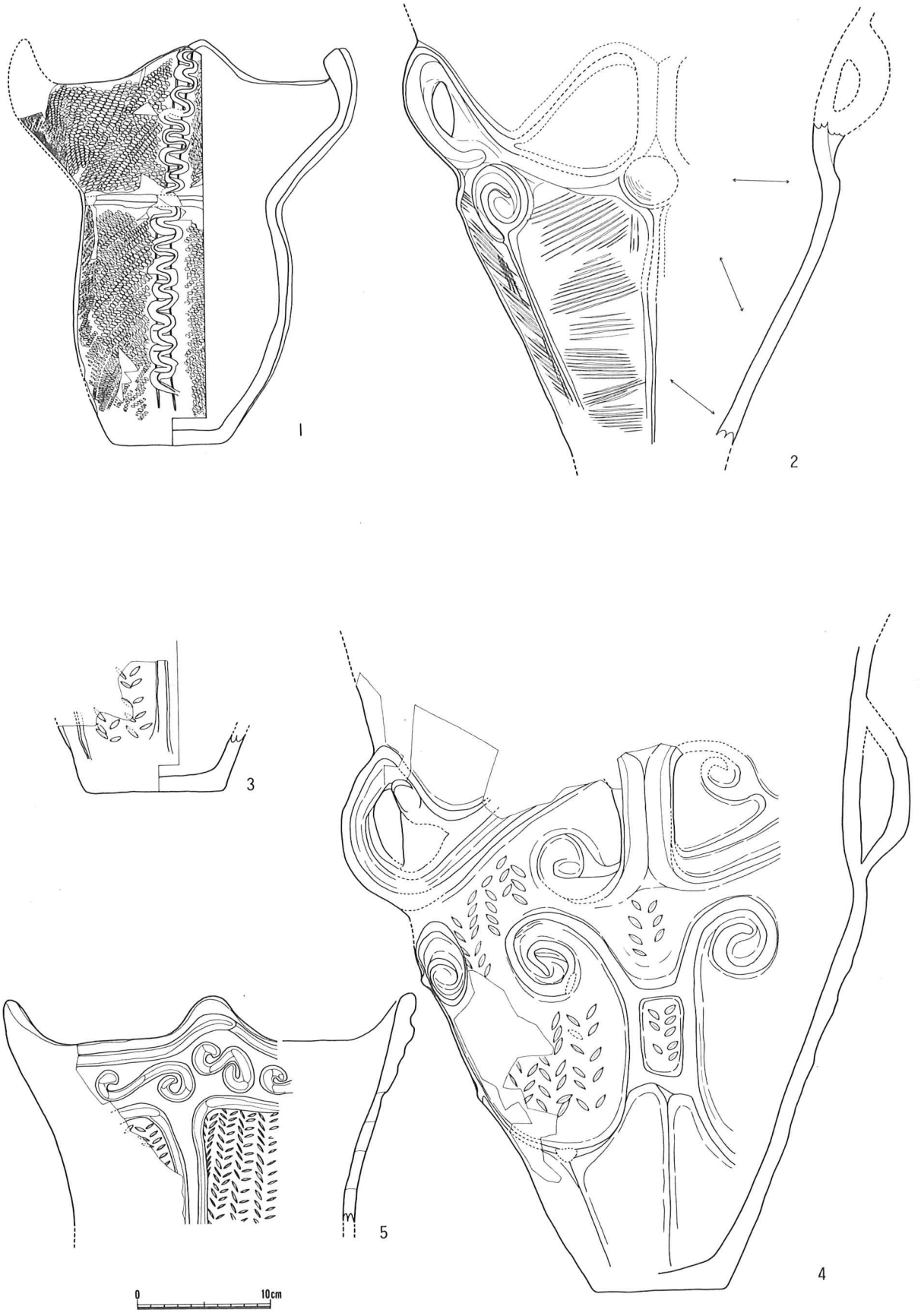
ここでは遺構出土の土器を挙げ、特に実測図（第12・13図）で図示した土坑埋設の土器を中心に説明し、その他の土坑出土の土器は拓影を挙げることとする。

第12図１の土器はＳＰ87の埋設土器で前述したように土坑底面に伏せて埋納されていた。ほぼ完形だが波状口縁の頂部を一部欠失している。器形は平底で胴部は膨らみをもち一旦くびれた後大きく開くキャリパー形の深鉢である。口縁部は四山の波状口縁を呈し、内側に肥厚しながら内湾する。最大径は25.5㎝・底径8.3㎝・器高29.9㎝を測る。外面には地文として縦位のＲＬ縄文がほどこされる。体部のくびれ部には器面を横に一周する形で隆帯が貼付され、また波状口縁の相対する二か所の頂部からは平行する２本の沈線が縦位に付けられ、その上に蛇行する隆帯が貼付される。また他の２か所の頂部からは縦位に直線の隆帯が貼付される。隆帯は貼付の後ナデ調整が行われ断面三角形状を呈する。施文は縄文が先に行われている。胎土は比較的緻密で、微細な石英粒・長石粒・雲母粒を多く含む。焼成も良好で色調はやや赤味を持った褐色を呈する。中期後葉の物と考えられる。

第12図２・３の土器は共にＳＰ105の埋設土器である。出土状況については前述したように、底部を欠失した図２の土器の内部に底部のみの図３の土器がはめ込まれやや傾いた状態で埋納されていた。他文等の状況から曽利Ｖ式に平行する中期末の年代が考えられる。

第12図２の土器は底部はなく（埋納時には既に欠失しておりあるいは意図的な欠失かもしれない）、また口縁部を含む体部の上半は埋納後土坑の上面が削平された際失われたと考えられ、土坑外から一部の破片が出土している。器形は小型の底部から直線的に広がり体部上半で一旦くびれその後大きく開く深鉢で、体部上半のくびれ部で４つの大型把手（Ｘ状把手が退化した橋状把手）が付く。現存最大形（把手部は除く）は28.6㎝、現存高は31.5㎝を測る。器面はこの大型把手によって縦に４分割され文様単位を構成する。文様は把手下の円文から底部に向かう低い隆帯と把手間を結ぶ隆帯による区画が１単位となり、区画の中央に隆帯による蕨状の渦巻きを施し、その両側に地文として櫛状工具による条線を斜めに付ける。一単位の条線の本数は14～４本と様々だが大きく見れば蕨状渦巻きを挟んで逆八字形になるように付けられている。なお、一部には地文の下に器面調整によるものと見られる縦位の条線が見られる。隆帯は貼付の後かなりナデ調整を行い隆帯は低い。胎土はやや粗雑で最大２㎜までの砂粒をかなり含み長石粒？と見られる不透明な白色粒が多く混ざる。色調は外面は黄褐色で内面はやや赤味がかかり焼成はやや脆い感じがある。

第12図３の土器は前述の土器の内部にはめ込まれていた深鉢の底部である。残存高は５㎝程度で底径は９㎝を測る。器形は不明である。縦位の低い隆帯によって区画され、米粒状の刻みによって逆八字状に地文が付けられている。胎土はやや粗雑で１㎜内外の砂粒特に長石粒？を多く含む、色調は赤褐色で



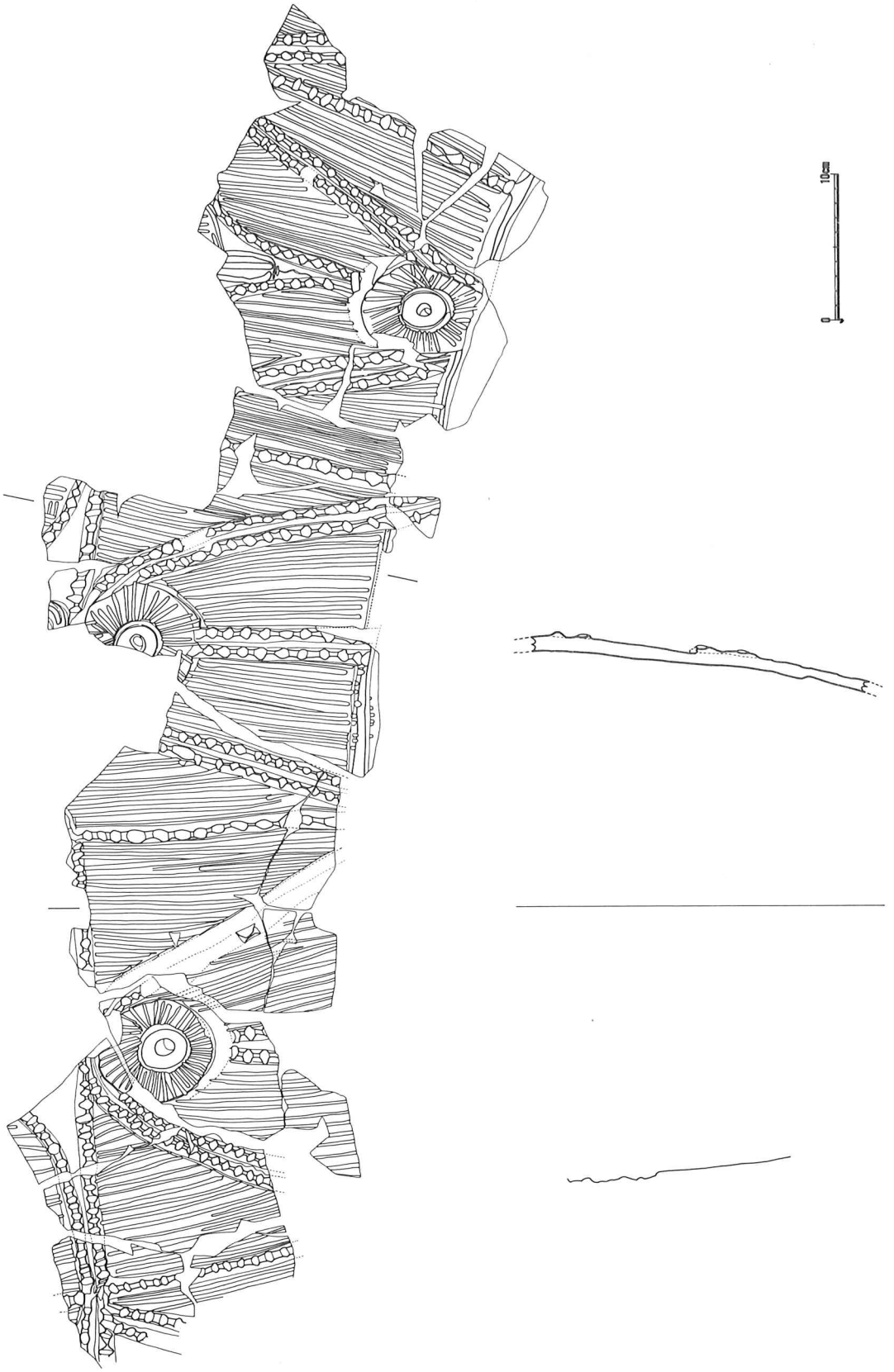
第12図　土器実測図

やや脆い。保存状態も良好でなく表裏共あばた状の凹みが多く見られる。

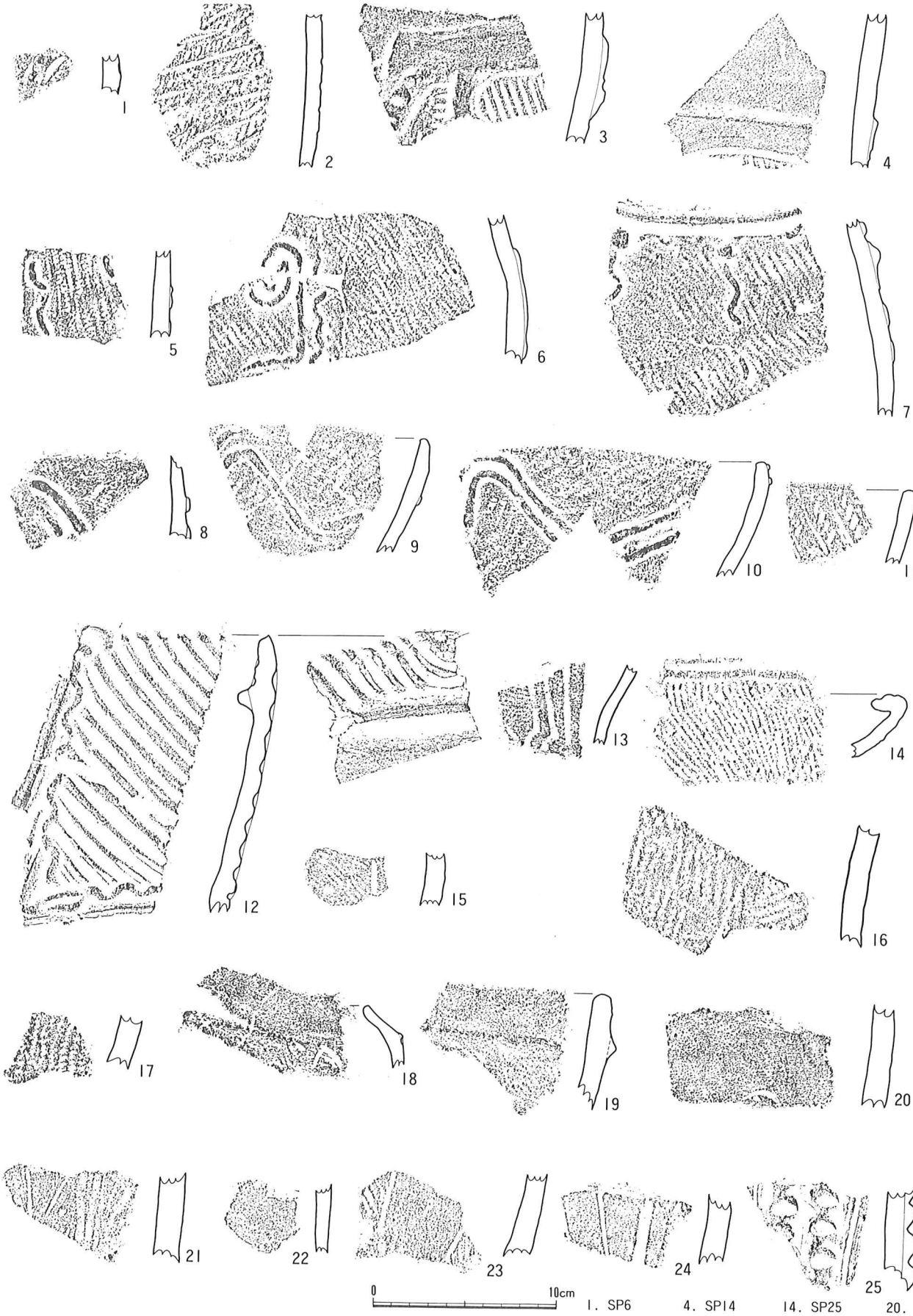
第12図４の土器はＳＰ104の埋設土器で、図２の土器と同様４つの大型把手を持つ深鉢である。土器は土坑底面に付けられた凹みに正位で据えられ、土器の内部には大型の川原石がほうり込まれている状況であった。上面の削平等により口縁を含む上半部が欠失しており、また土坑が攪乱坑により４／１程破壊されるに伴い把手１つを含む体部の一部も欠失している。器形はやや小型の底部からかなり直線的に開き把手が付く付近で一旦くびれた後外に開きながら立ち上がる図－２の土器の器形と同様であるが図２に比べると底部が大型で胴下部に幾分膨らみを持ちくびれもやや弱く全体的に開きが弱く背が高い印象を持つ。現存高は47㎝、現存最大径は38.5㎝、底径10㎝を測る。Ｘ状把手が退化したと見られる大型の橋状把手は間に渦巻き等を介して隆帯によって連結している。把手部分より上は現存部分では無文の様である。把手部以下の体部が文様帯となっており把手に対応してナデ調整を行った調整隆帯によって文様が描かれる、単位文様は把手下の背中合わせの２つの蕨状の渦巻き文が主要なモチーフでこれは２本の隆帯によってつながれその間は窓枠状に地文部となり、渦巻きを連結する隆帯の中央から底部に向かい１本の隆帯が延びる。渦巻きの下端は弧を描きながら隣の単位の渦巻きの下端につながりその連結部からは底部に向かい１本の隆帯が延びる。地文は把手部と単位文連結の隆帯との間の空隙を埋めるように施され、長さ10㎜の米粒状の刺突を縦列ごとに連続して行い、列ごとに傾きを変え八字あるいは逆八字状に施す。胎土は２㎜までの砂粒をかなり含み長石粒？と見られる不透明の白色粒が多い。色調は下半部は赤褐色（鈍いオレンヂ色）で上半部は暗～黒褐色を呈し、焼成はやや脆いが比較的良好である。遺物の時期はＳＰ105出土の図２・３の土器とほぼ同様な曽利Ｖ式平行の中期末が考えられるが若干先行するものかもしれない。

第12図５の土器はＳＰ14から出土したものだが覆土から出土した破片で、埋設土器とは考えにくい。口縁部の全周１／４程の破片である。推定される口径は30㎝程度である。口縁は波状口縁で残存部から考えると比較的単純に外に開く器形と見られる。口縁部文様帯は太沈線により口縁にそって横位の沈線が付けられ、その下に太沈線で横向きのＳ字状のモチーフがいくつか施される。体部文様帯は口縁部文様帯の下に太沈線による窓枠状の区画内に地文が施される。地文は尖った米粒状の刺突が縦に連続し、列ごとに傾きを変え逆八字状を呈する。施文順は地文が沈線に先立って施文されている。胎土は１㎜までの小砂粒を多く含み若干粗雑である。色調は赤褐色～暗褐色で焼成はやや脆い感じがある。遺物の時期は図２～４と同様と見られる。

第13図の土器はＳＰ119の埋設土器で、土器の体部が輪切りの状態で横倒しになっていたと見られる出土状況であった。口縁部・底部とも残っておらず円筒型の深鉢の体部のみが残されている。残存部での最大径は37㎝・残存する高さは23㎝を測る。文様は残存部が少ないこともあり明言はできないが日輪状を呈する楕円形文と直行あるいは斜行する刻みを付けた隆線で１単位のモチーフを構成し、基本的にはこのモチーフの上下を入れ替えながら横に連続させ４単位で器面を一周する。この隆線による三角あるいは長方形の区画内に地文として縦位の条線が施される。胎土はやや脆く、１㎜程度の砂粒を多く含み特に長石粒？らしい不透明の白色粒が目立つ。色調は黄～赤褐色で一部に黒ずみが見られ焼成は良好である。中期中葉の時期が考えられる。

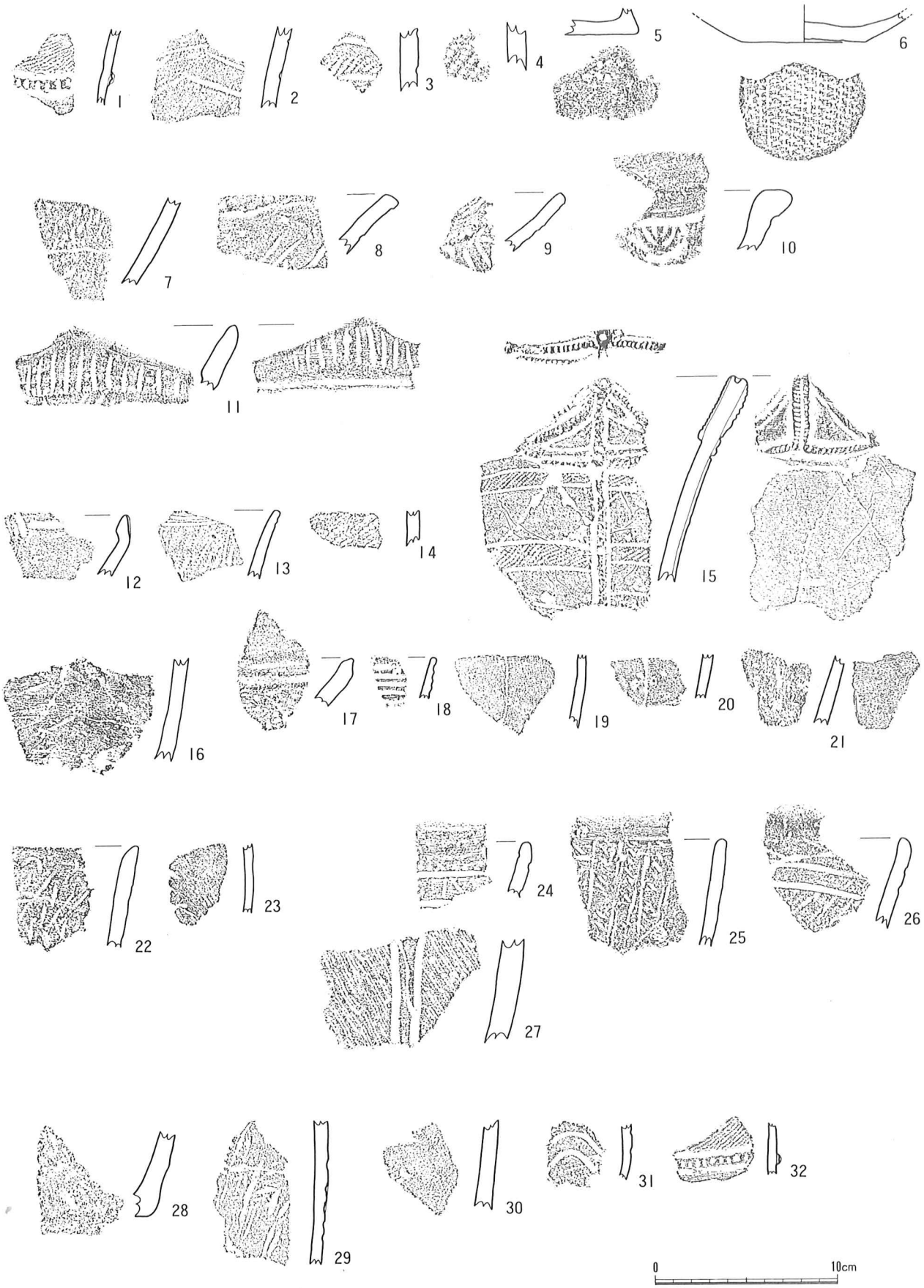


第13図　土器実測図 2



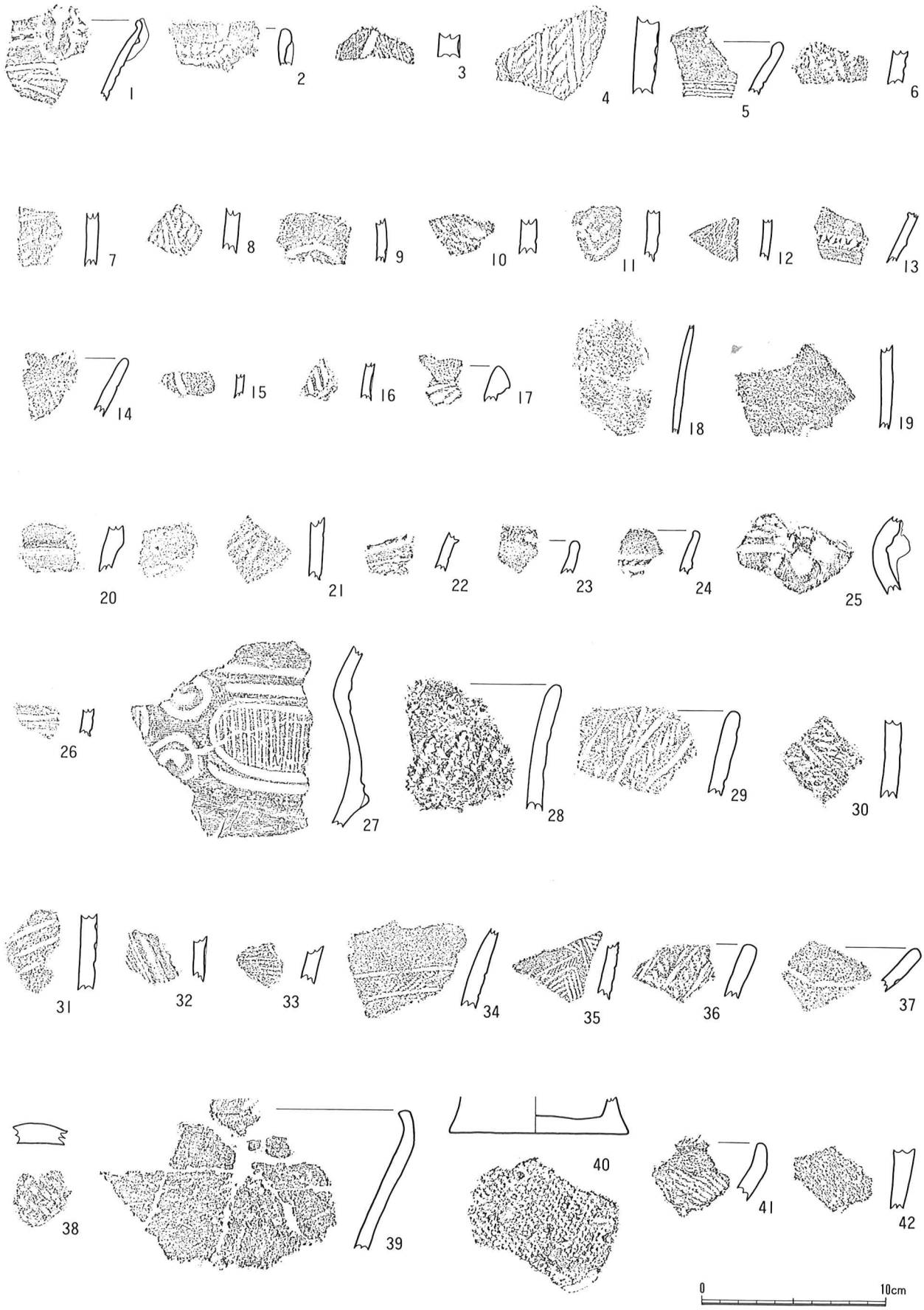
1. SP6　2. SP9　3. SP13　4. SP14　5～11. SP15　12・13. SP22　14. SP25　15. SP28　16～19. SP30　20. SP40　21・22. SP43　23～25. SP47

第14図　土器拓影図 1



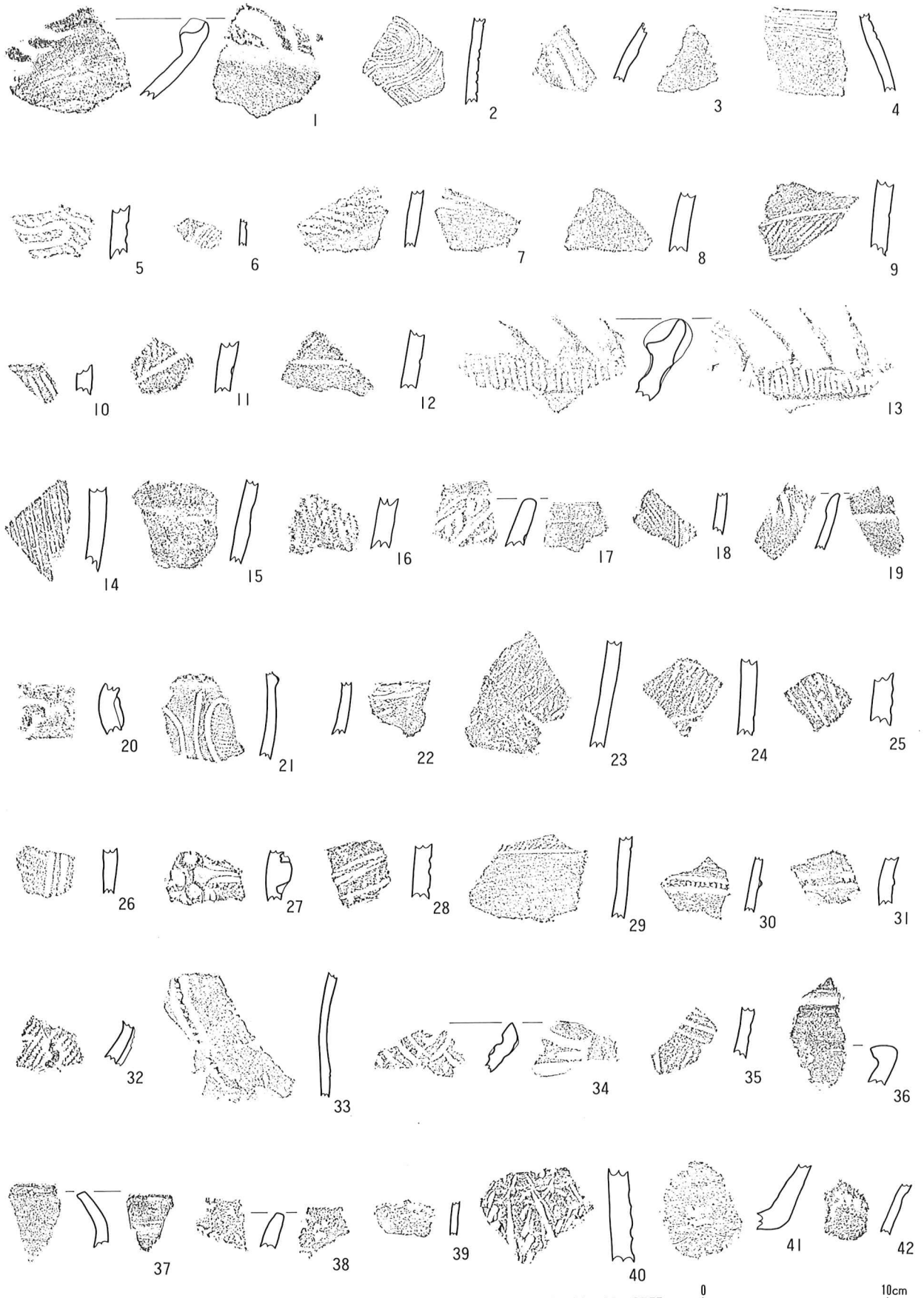
1～5. SP47
6. SP48
7～11. SP49・50
12～14. SP51
15. SP53
16. SP54
17～23. SP55
24～27. SP56
28～32. SP58

第15図　土器拓影図 2



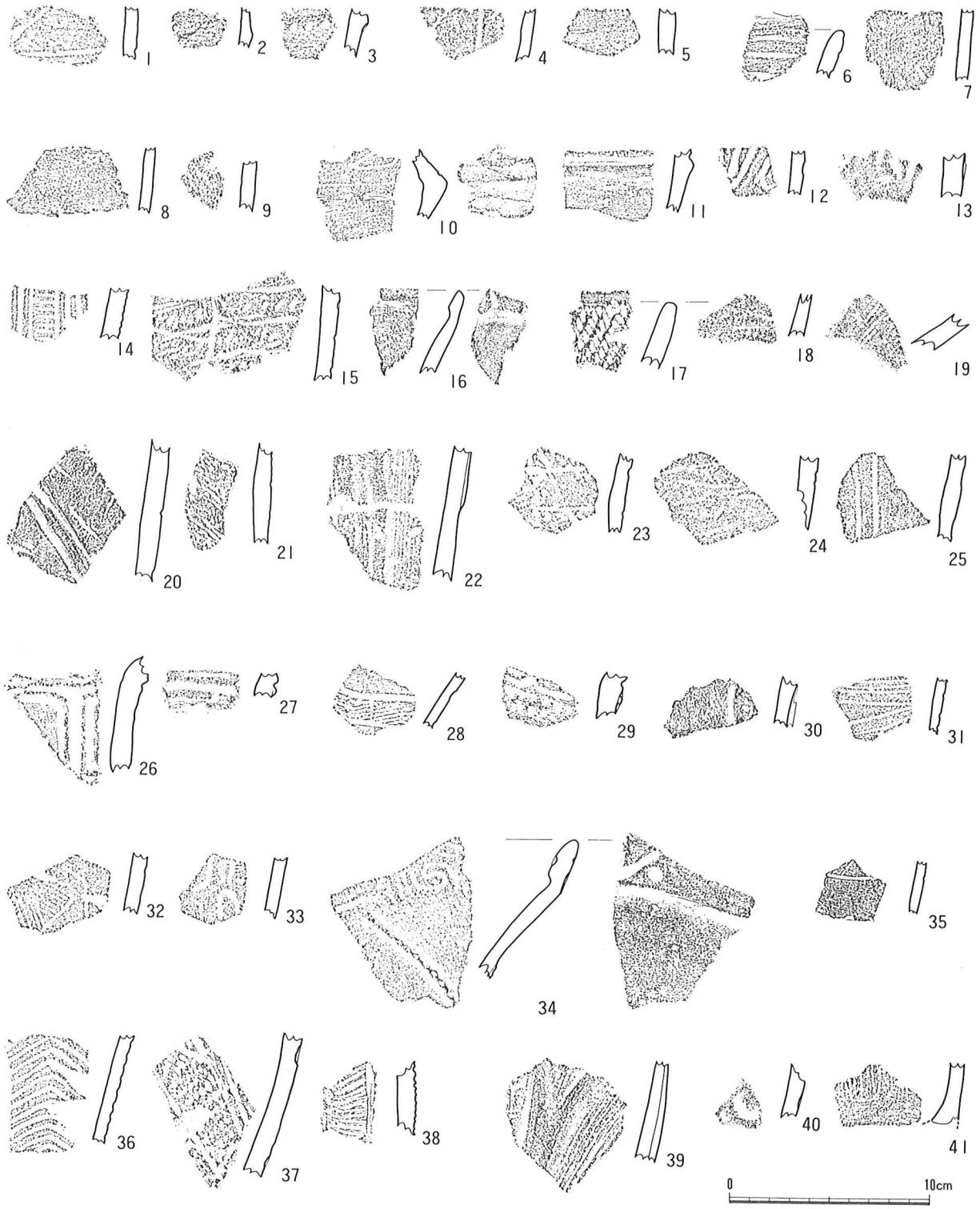
1～17. SP58　28～38. SP60　40～42. SP62
18～27. SP59　39. SP61

第16図　土器拓影図 3



1. SP64　14・15. SP68　21. SP72　33～39. SP75
2～7. SP66　16. SP70　22～28. SP73　40. SP76
8～13. SP67　17～20. SP71　29～32. SP74　41・42. SP77

第17図　土器拓影図 4



1～3. SP77　17～19. SP84　39～41. SP91
4・5. SP78　20・21. SP87
6～9. SP79　22～34. SP89
10～16. SP80　35～38. SP90

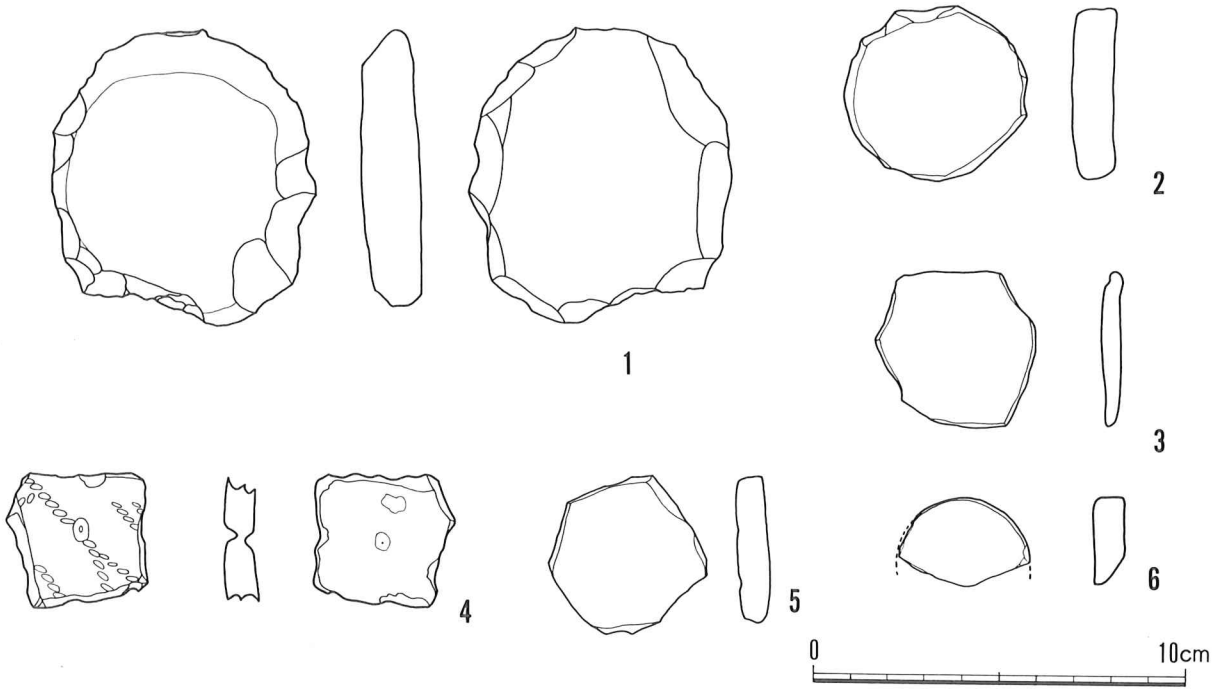
第18図　土器拓影図 5

1・2. SP91
3・4. SP92
5～8. SP93
9. SP94
10～22. SP99
23. SP110
24. SP115
25・26. SP119
0
10cm

第19図　土器拓影図 6

b．土製品（第20図）

出土した土製品は土器片を利用した土製円板で多くは体部片を打ち欠いて円形〜多角形に整形したものだが、底部片を利用したもの（図１）・口縁部片を利用したもの（図３）などもあり、また図４は体部片を長方形に整形し表裏の両面から盲孔が付けられている。

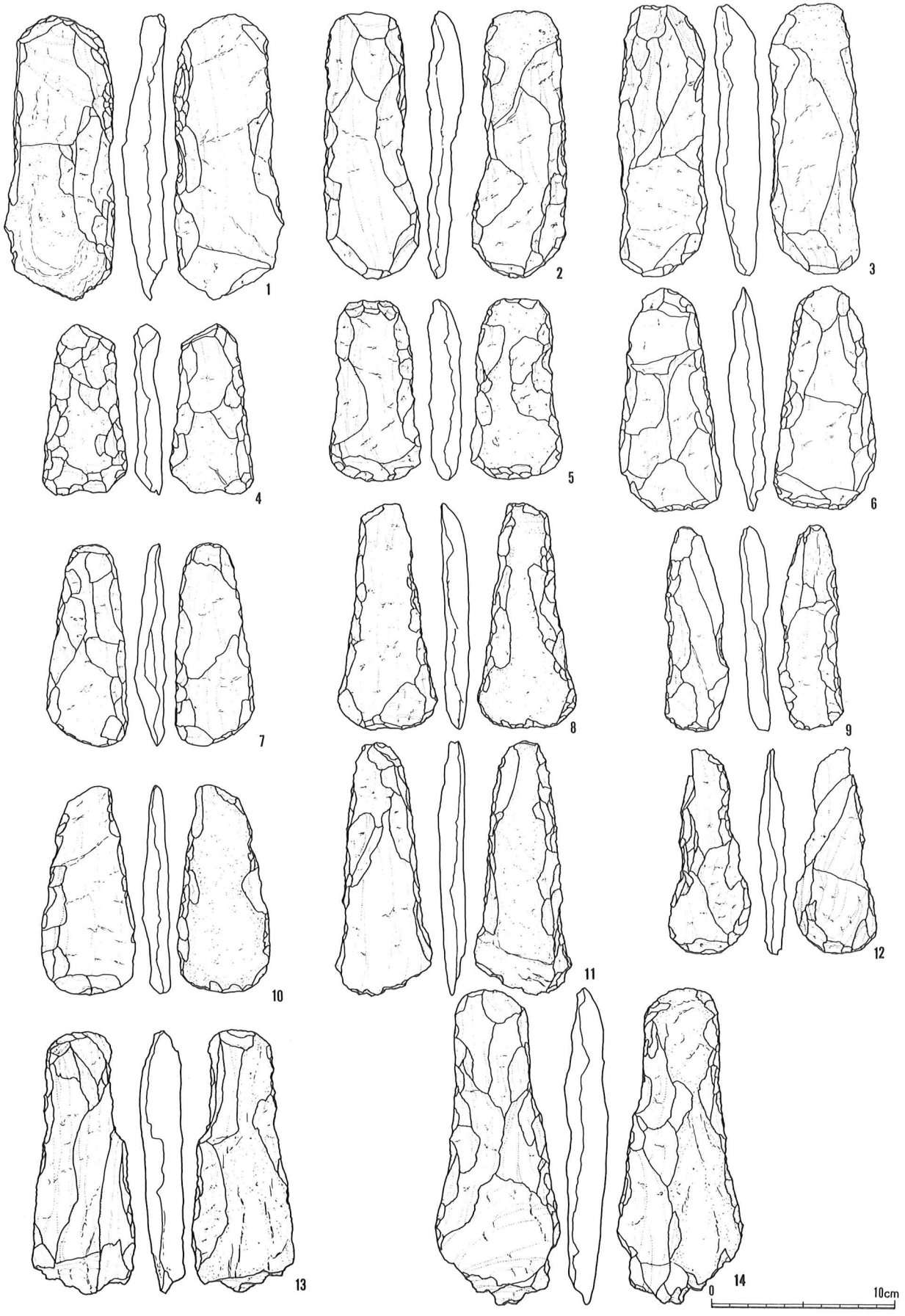


第20図　土製品実測図

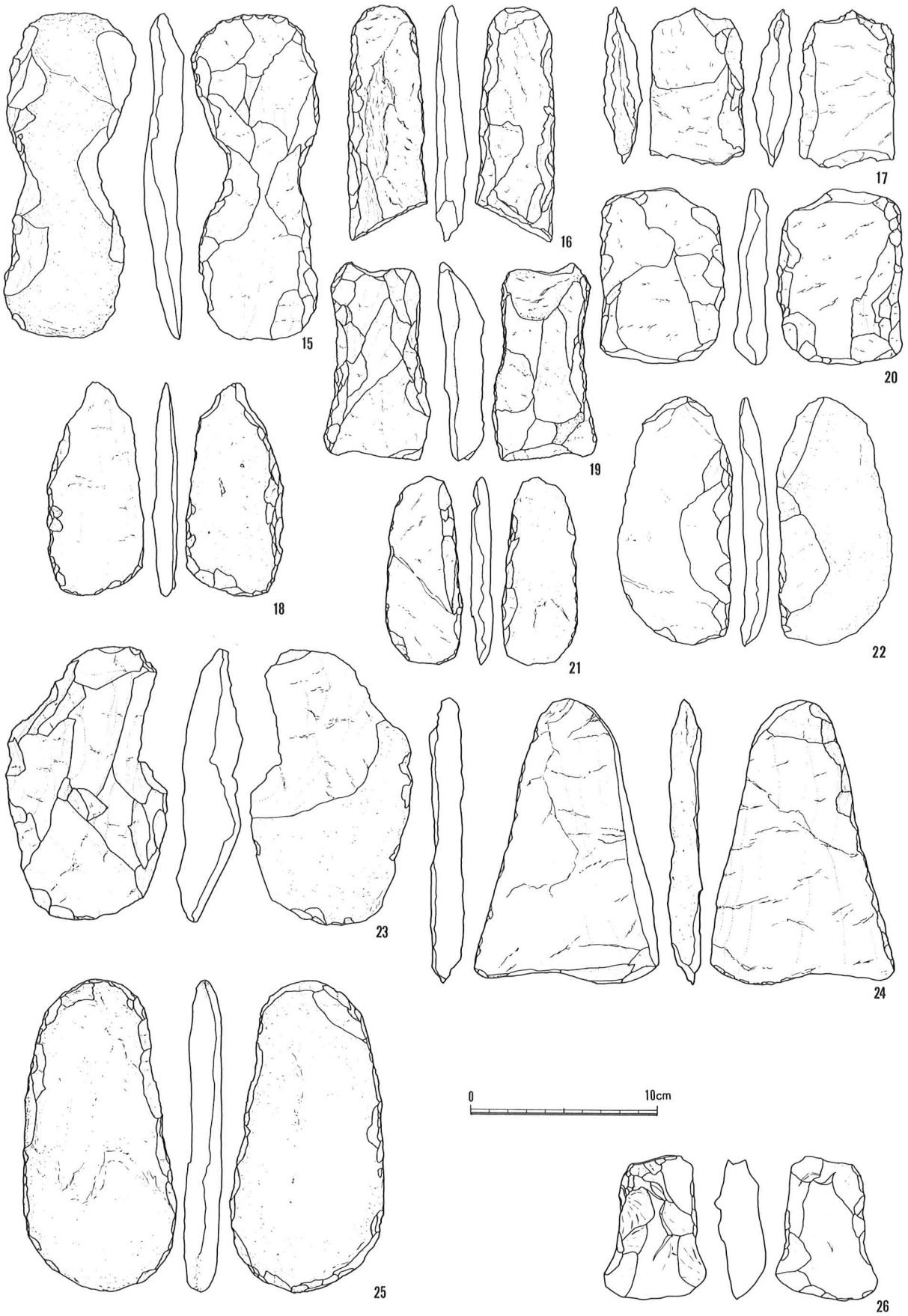
c．石器

今回の調査で出土した石器はかなりの点数にのぼるが、量的には大部分が石片・フレイクで、特に集中した地点はないが土坑覆土や配石遺構周辺で比較的多く出土している。製品としての石器には打製石斧・磨製石斧（破片）・石鏃・石匙・石錘・石皿（凹石）等があり、打製石斧が多く石鏃の少ない中期的な石器のあり方を示している。

打製石斧（第21・22図）　破損品が多く、完形の物は少ない。多くは比較的薄手で粗雑な作りの石斧で刃部も不明瞭である。形状は短冊形（側辺がほぼ平行するもの）・撥形（刃部側に幅広で長台形を呈するもの）・分銅形（側辺の中央部が強くくびれるもの）の３形態が見られ撥形の物が最も多いようだが、形状は明確に分類されず中間的な物もあり、また形態間に製作や使用の大きな差異や調査では年代の差を見出すことはできず、ここでは大きく３形態がとらえられるに留めたい。側辺には装着痕と考えられるつぶれや弱いくびれを持つ物が多い。またここでは形状から一応打製石斧としたが図21・22の様に刃部となるべき短辺部に加工や使用が見られない物は石斧あるいは石斧未製品と考えるより長辺部を刃部とする刃器あるいは調整具と考えられる。一方図―26は厚手で比較的しっかりした作りの石斧で他のものとは別の用途をもつと考えられ、石材も頁岩を使用している。



第21図　石器実測図 1



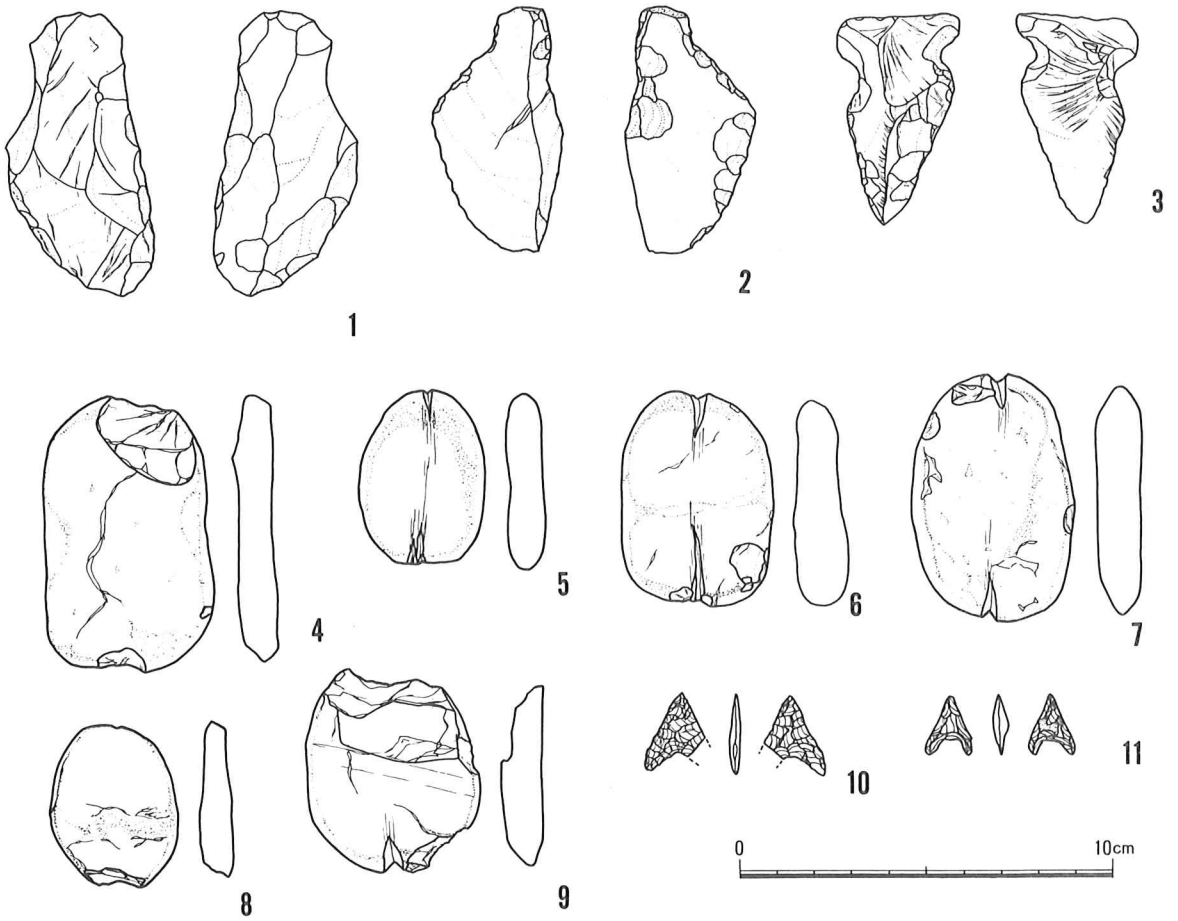
第22図　石器実測図 2

石鏃（第23図10・11）　無脚石鏃で図10は黒耀石、図11は頁岩製。石鏃はこの２点出土したのみ。

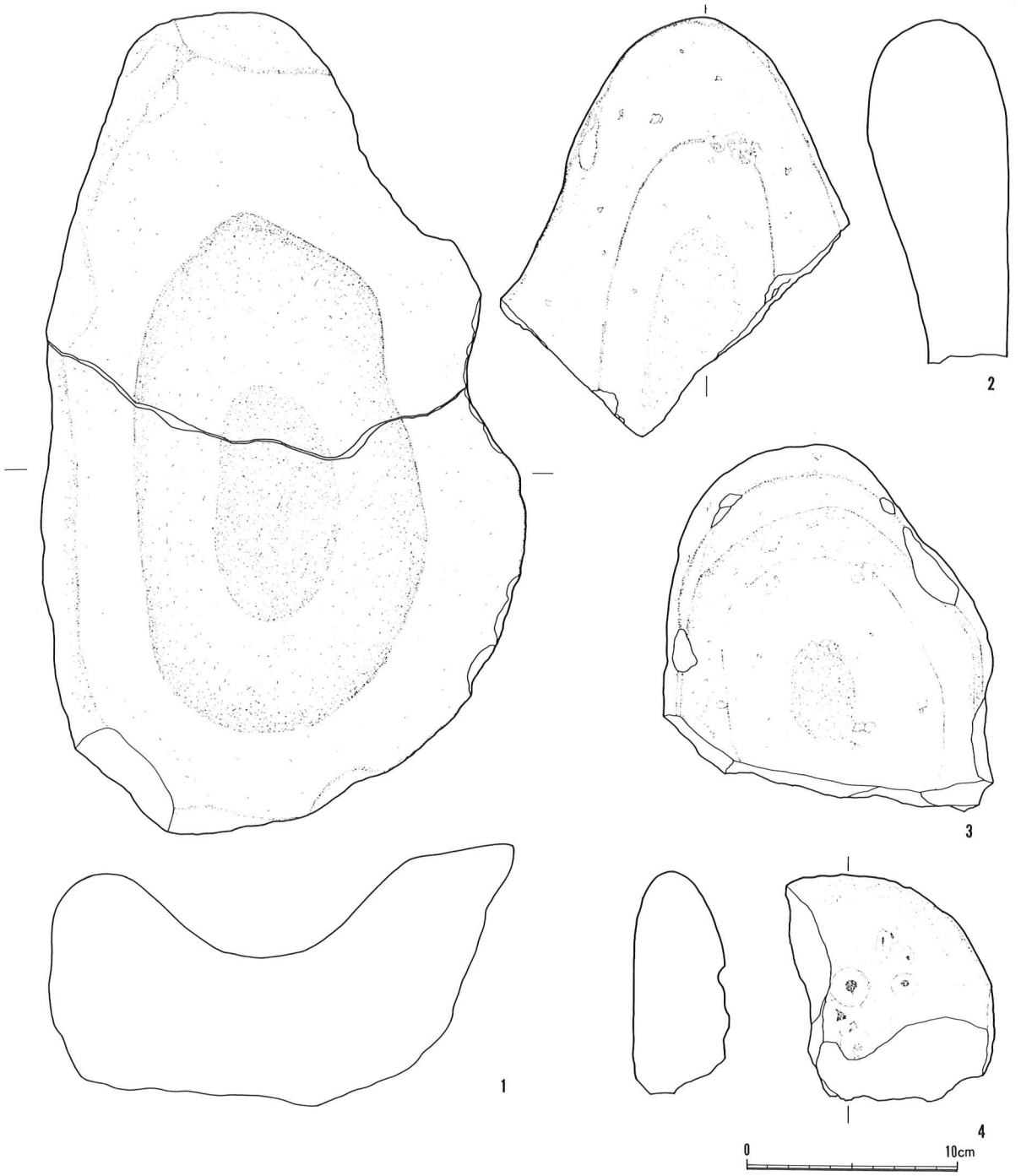
石匙（第23図１～３）　完形は３点出土している。石材は頁岩で縦形の石匙である。

石錘（第23図４～９）　扁平な川原石に紐掛部を作り出したもので、紐掛部の作り出しが摩り切りによるもの（図５～７・９）と打ち欠きによるもの（図４・８）がある。

石皿（凹石）(第24図)　破片で出土するものが多く、図示したものは比較的形状を留めているものである。中央部を中心に大きく凹んだ石皿の他に図４の様に多くの小凹が見られる所謂蜂の巣石も稀に見られる。図１大型石皿は上下に割れており、上部はＳＰ91から下部はＳＰ84からと異なった遺構中から出土している。また図２の石皿は調査区周辺での表採品である。



第23図　石器実測図３



第24図　石器実測図 4

第V章　ま　　と　　め

今回の調査区域は、遺跡の中心部と目される位置からはずれた台地の縁辺部であり、個人住宅建設の事前調査のため約250㎡という狭い面積である。

このため南原遺跡の全体的な性格をつかむには至らなかった。しかし、埋甕4個体をはじめとした縄文時代中期から後期にかけての土器や石器等の遺物が多く出土している。また、8ケ所に柱穴の認められる住居跡1基、環状につながるかと思われる配石遺構、その配石遺構下から検出されたものも含めて総計119基の土坑等の遺構が確認されている。これらからだけでも、相当長期間にわたり集落の存在した、規模の大きい遺跡であると推察できる。

更に配石遺構や土坑等の検出状況から、今回調査した区域は集落の祭祀的な意味をもった場所であろうということも考えられる。

これらの事から、本遺跡の立地条件、想定される規模の大きさ、豊富な遺物量、配石遺構や密度の高い状態で検出されている土坑の存在等からみて、芝川町における貴重な縄文時代中・後期屈指の遺跡であるといえる。

この地域は昔から畑地として利用されてきている。しかし、耕作土下にしまりの強い火山灰層が分布しているため、その火山灰層まで掘り起こすような深耕をしなくてもすむような作物が栽培されてきたようである。今回の調査区域がそうであったように、南原遺跡全体が〝まさ〟とよばれる硬い火山灰層によって保護されている可能性が大きく、従って遺物や遺構の残存状態は良好であろうと思われる。

現状ではこの台地の殆どが畑地として利用され、造成等の開発はあまり進んでいない。しかし、今後もこのままの状態で遺跡の保存がはかられるとは限らず、現に宅地化のすすむ兆もみられているので、今後の開発には注意していきたい。

発掘区に隣接した畑地を表面観察してみると比較的広い範囲にわたって、土器片や石器片、配石に使われたと思われる礫等の散布が見られる。

今回の発掘による成果や散布している遺物等の状況から、その質・量ともに注目に値するものであり早急に遺跡の範囲や内容を確認する計画をたて、遺跡の保存を図る必要があろう。

図　　版

図版 I

1

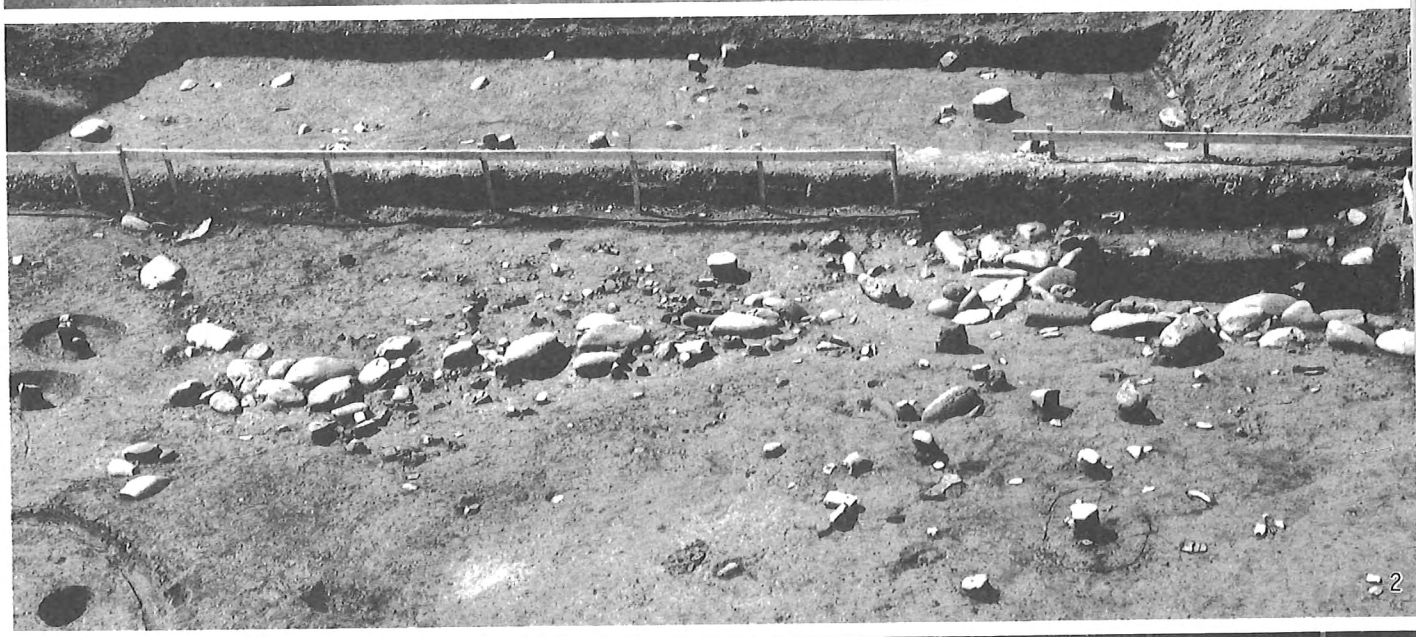
2

3

4

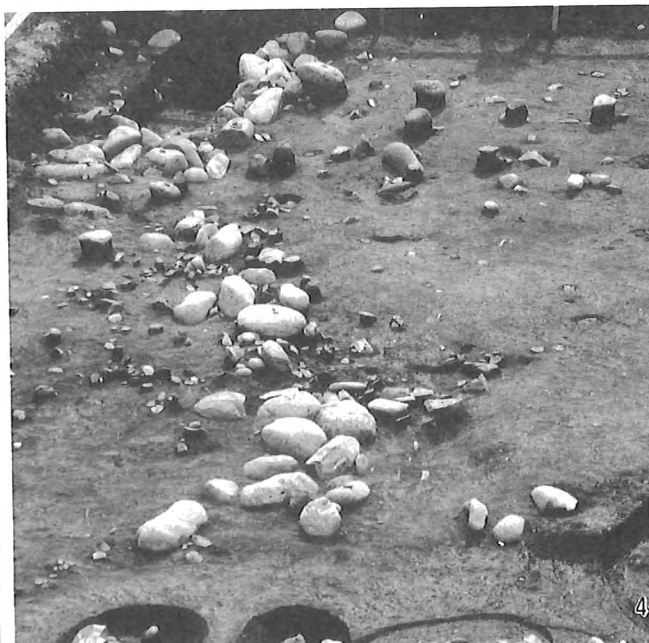
図版 II

1



2

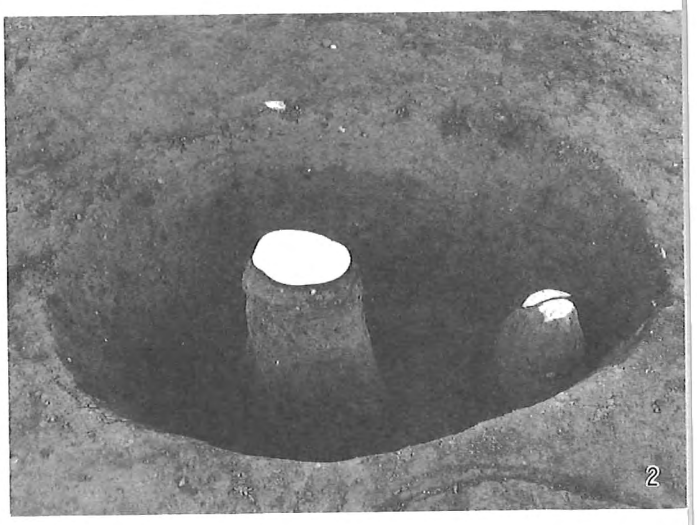
3



4

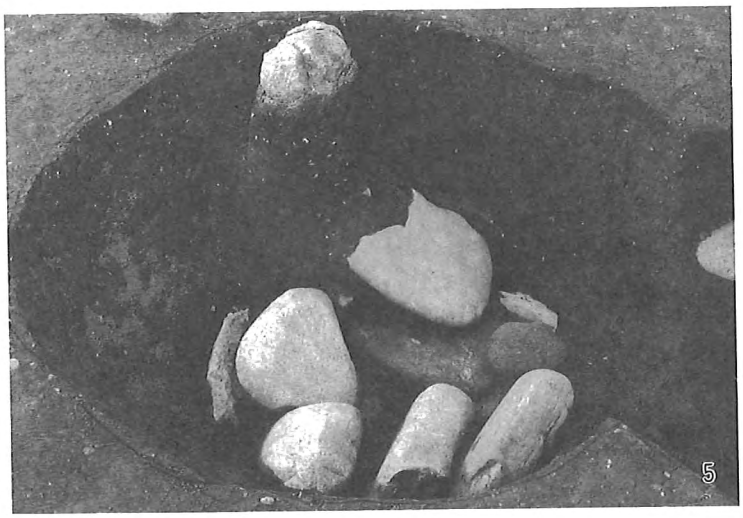
図版 III

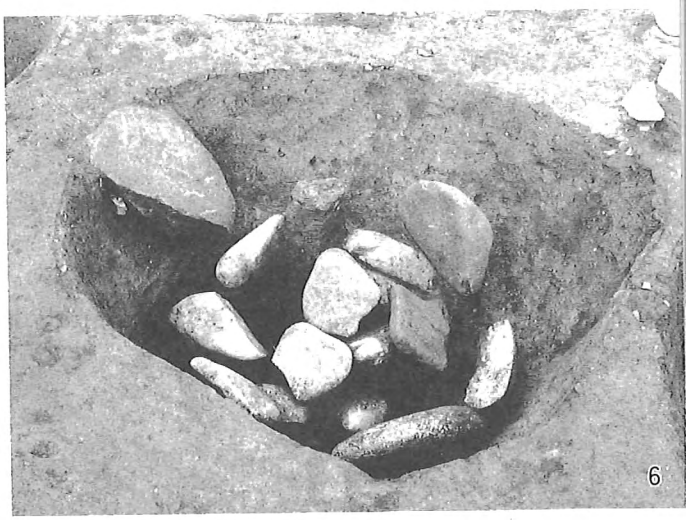
1

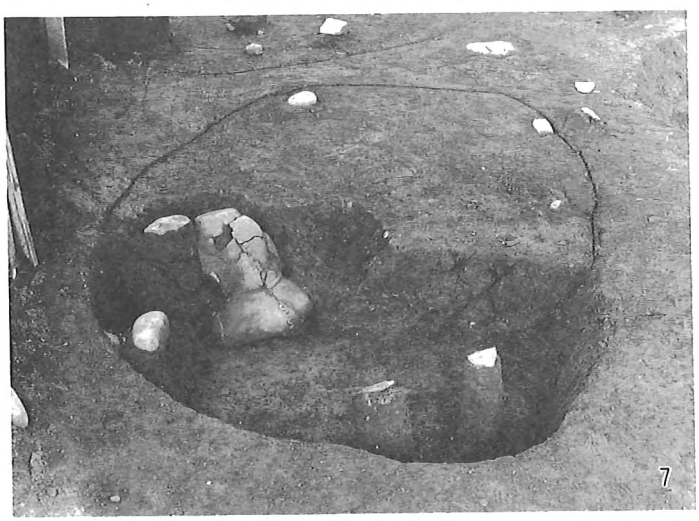

2

3

4


5


6

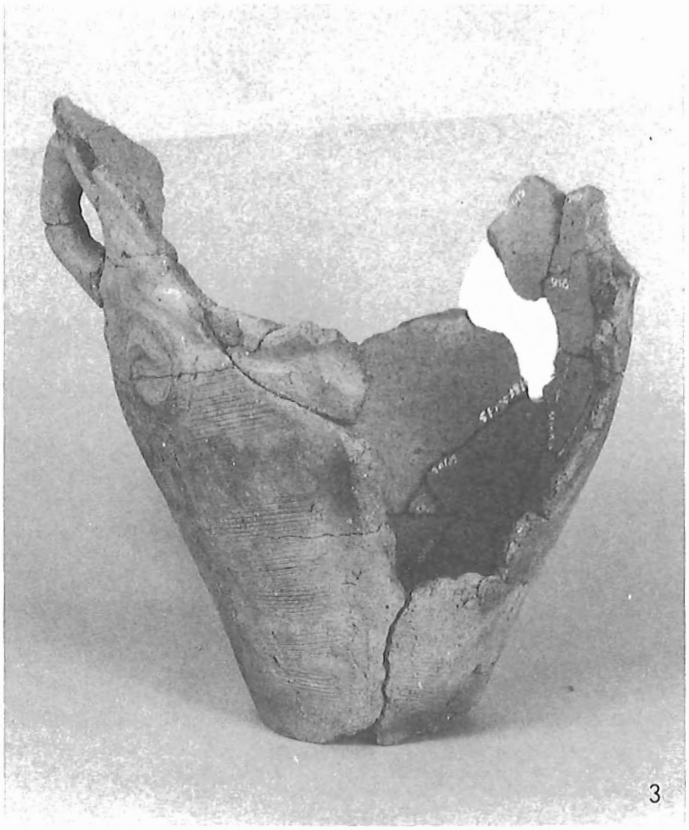

7

8

図版 IV

1

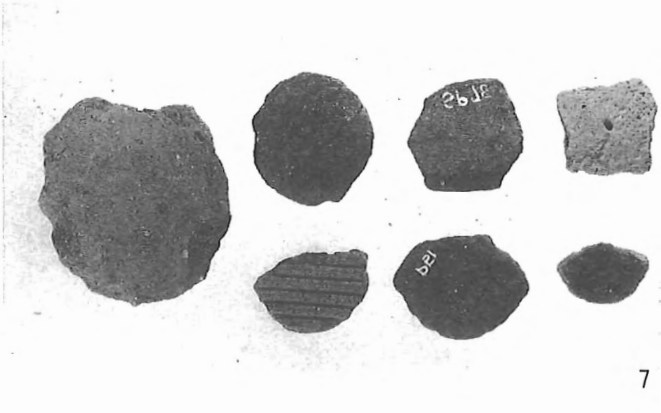
2


3

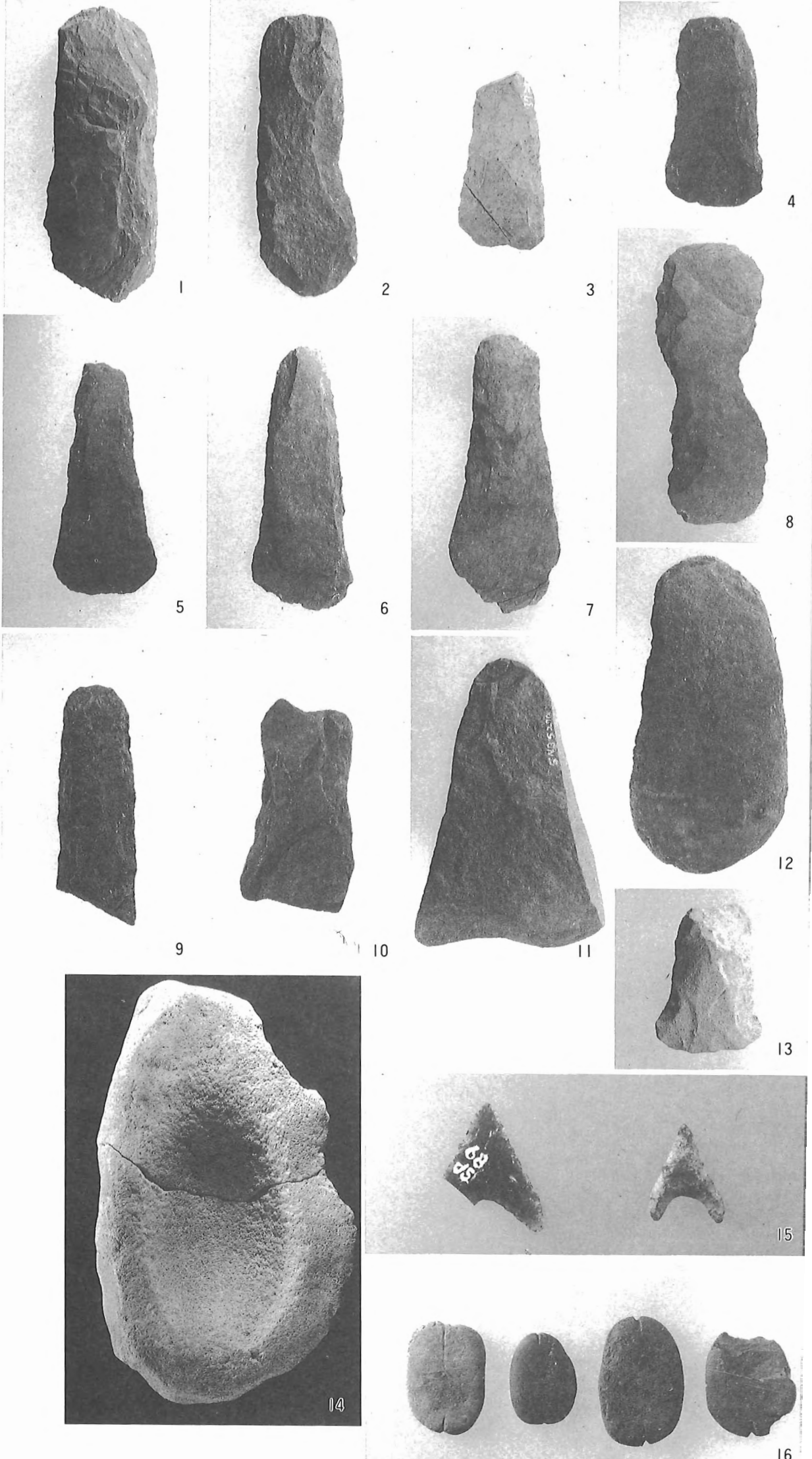
4

5

6


7

図版 V



南　原　遺　跡
発掘調査報告書

昭和60年３月30日

編集・発行　芝川町教育委員会

印刷　静岡市中村町166番地の１
株式会社　三　創
TEL（0542）82－4031